

Soma x Soma

Yusuke Eguchi



満月。

雲。

海洋に浮かぶビル群。

ビルの屋上。

音も無く煌めく閃光。

飛び散る赤い液体。

宙を舞う人の左腕。

少し遅れて爆音と共に弾け飛ぶ高架水槽。

スコールのようにふり注ぐ水。

左腕を失った少年。

左肩から吹き出す血。

足下に広がる血溜まり。

水に濡れた長い髪が顔に張り付いている。

隠れた目と額が赤く光っている。

傍らに漆黒のドレスに身を纏った少女。

黒い傘を手に冷たく微笑む。

無表情の少年。

ゆっくりと前進する。

その先に若い男女。

恐怖で顔を引きつらせる。

手を突き出す青年。

連続して閃光が放たれる。

残った右腕が吹き飛ばされる。

前進する少年。

腹に穴が開く。

前進する少年。

耳が千切れ飛ぶ。

血まみれの少年は青年の前に。

青年の恐怖が最高潮を迎える。

少年の目と額が強く光る。

口元が不適に大きく歪む。

きりもみしながら宙を舞う青年。
失ったはずの右手で青年を殴り飛ばす少年。
何度も殴り続ける。
何度も閃光が迸る。
何度も殴り続ける。
何度も吹き飛ばされる。
何度も殴り続ける。
何度も再生する。
何度も殴り続ける。
やがて沈黙。
そして、また満月。
そして、また雲。
そして、また海洋に浮かぶビル郡。
破壊され尽くした屋上。
自分以外の血に塗れた少年。
漆黒のドレスに身を纏った少女。
不敵に微笑む二人だけが佇んでいた。

気がついたら双間 創真（そうま そうま）は自室の天井を眺めていた。

カーテンの隙間から朝日が差し込み、鳥のさえずりが聞こえる。

どこからともかく朝食を作る音や匂いが漂ってくる。

もう朝だ。

軽い微睡眠の中で、創真は夢の内容を思い返す。

それは何時も見ている夢であった。

深夜に神戸の何処かで、超能力を持つ敵と戦っている夢だ。

その夢の中で創真は何時も黒いドレスの少女と一緒にいて、再生能力で敵を圧倒して終わる。

小柄な体を包むフリル付きの黒いドレス、踵の高いブーツ、額で切りそろえた前髪に長いツインテール、真っ白い顔に浮かべた静かな微笑。

一見すると原寸大人形のような独自の雰囲気漂わせるその少女の事が脳裏に焼き付いて離れなかった。

「お父さん朝だよー！！」

創真が物思いに耽っていると、突如として鳴り響く金物の音と、少女の大声で現実へと引き戻された。

鉄筋コンクリートの壁の向こう側から聞こえてくるそれはいつも通りの朝の知らせだった。

団地の隣の家に住む幼なじみの旭陽 空（あさひ そら）の声である。

いくら古い団地とは言え、ここまで声が筒抜けになるとは、何たる大声だろうか。

「創真お兄ちゃんも起きてー！！」

しかも、となりの家から直接モーニングコールを送ってくる。

「起きてるって！」

「そこまで大声だされりゃ誰だって起きる！」

何時もながら非常識な奴だと思いながらも、創真も出来る限りので大声で返した。

「そんな事言うとお兄ちゃんだけご飯抜きなんだからねー！！」

「そりゃねーよ」

まったく、人が物思いに耽っているのになんて無粋な奴だ。

ふと、バフィリード（近鉄バッファローズのマスコット）の時計をちら見すると、6時15分を指していた。

何時もの起床時間よりも15分は早い。

いや、二度寝する事を考えると30分は早い事になる。

もともと早く目覚めていたとは言え、損をした気分になった。

一体、何だってこんなに早いんだ・・・？

・・・。

カレンダーを見てみると、1999年6月30日（水）だった。

・・・。

・・・。

・・・。

そうか、今日はあいつの16歳の誕生日か。

完全に忘れていた。

2歳年下でガキっぽいが、やっぱりガキまるだした。

認めたくないものだな、若さ故の過ちと言うものを・・・。

・・・。

創真は苦笑する、どちらかと言うと下らない事を考えてしまった、自分自身の若さ故の過ちに。

「もう、お兄ちゃん早くー！！」

「わかってるよ！」

創真は高校の夏服・・・黒っぽい学生ズボンに、裸の上からワイシャツを羽織る。

最後に額に残る大きな傷を隠すように、長く伸びたボサボサの前髪を撫で付ける。

額の傷は4年前の1995年、中2の終わりに大震災によって負ったもので、その時家族も失ったらしい。

らしいと言うのは、創真にも詳しい事は解らなかった。

その怪我により創真は1年間昏睡状態になり、意識を取り戻した後も殆どの記憶を無くしたからだ。

家族を無くし記憶を失ったたという事は、普通ならば気にすべき事かも知れないが、創真にとってまるで他人事のようにどうでも良い事に思えた。

創真は最低限の筆記用具と、小説を三冊・・・新ロードス島戦記序章と、魔法戦士リウイ3巻、今夏公開のスターウォーズEP1のノベライズの入った鞆を手にする。

教科書は教室のロッカーに詰めっぱなしなので必要ない。

大切なのは日々の暇つぶしだけだ。

創真は部屋を出ると、リビングに鞆を置き、ベランダへと向かう。

外に出ると朝日が眩しく、一瞬視界が奪われる。

まだ梅雨が明けていないと言うのに信じられない程の晴天だ。

目が慣れてくると高台に建てられた団地のベランダからは、海の上に浮かぶような神戸の街を一望できた。

眼下の団地の駐車場には一般的な乗用車に混じって真っ青なクーペ・・・旭陽家の車であるSUBARU IMPREZA WRX STI 22Bが停まっている。

そして、破損した敷居壁を潜り、隣・・・旭陽家に移動する。

本来、団地のベランダには、非常時に隣地に避難する為、簡単に壊す事の出来る敷居壁が設置されているのだが、空がこの方が便利だと蹴り破ってしまったので、現在はその残骸を止めるだけだ。

空は自分がこれだと思った事は絶対譲らず、突如としてとんでもない行動に出るので恐ろしい。

全く持って非常識な奴だ。

創真は苦笑する。

「・・・」

アルミサッシを開け放ち、旭陽家のリビングルームへとお邪魔する創真。

父と娘の二人暮らしの旭陽家では空が主導権を握っていて、カントリー風のテーブルやチェックのクロス、大型テレビと向かい合ったレザーのソファに鎮座する大きな熊のぬいぐるみ等、所々乙女チックな雰囲気漂っている。

創真の家と基本的な構造は一緒だが、左右反対の作りになっていることと、リビングの違いでイメージが大きく違う。

リビングの奥はキッチンになっている。

そのキッチンから、空が料理する匂いと音が聞こえてくる。

今日もワンパターンながらベーコンと目玉焼きだろうと創真は思った。

カントリー風のテーブルのイスに、空の親父・・・旭陽 昇が腰掛けて新聞を読んでいた。

おじさんは年齢40代前半で長髪、長身でハンサムな親父で、大病院に勤める脳神経外科の医者である等、男としてのポイントが高い。

レイヴァン製のサングラスをトレードマークとし、朝の室内にいるのにもかかわらず着用している。

きっと、寝ている時も着けているはずだ。

しかし、よれよれのスラックスとワイシャツ、だらしなく緩められたネクタイと、無精髭が全てを台無しにしている。

「おはよう、創真くん・・・」

・・・。

眠そうだ。

いや、眠気を通り越して顔が青い。

日々の激務に加え、30分も早く起こされればやつれて当然だろ。

まるで、バイオハザードだ。

迷わず成仏してくれ。

創真は心の中で手を合わせると、着席して朝食の到着を待った。

早くに家族を無くした創真は生活能力もなく一人暮らしをしている為、幼なじみである空の家に厄介になり飯を戴いているのだ。

「じゃじゃじゃじゃーん！！」

朝のテレビを見ていると、空が自慢げに料理・・・と言えるものか解らない物を見せつけながら登場した。

小柄な体を包むセーラー服、ボーイッシュなショートヘアーに、少し日に焼けた顔に太陽のような笑顔を浮かべたいつもの空だ。

手にしているものも、いつもと同じトースト2枚と、ベーコンと目玉焼きだ。

だが、しかし、目玉焼きが何時もと違った。

何時もの目玉焼きをEVA零号機とするならば、今日の目玉焼きはEVA初号機と言った所だ。

・・・。

これは誕生日記念と言う事だろうか・・・？

「これは豪華じゃないか」

続いておじさんの所に皿が運ばれる。

創真はおじさんの皿を見て仰天する。

創真の目玉焼きをEVA初号機だとすると、おじさんの目玉焼きはEVA弐号機だった。

最後に自分の分を運んできて、ちょこんと座った空の目玉焼きもEVA弐号機だ。

・・・。

「ちょっと待て。

目玉焼きの数に悪意的なものを感じるぞ」

「おにいちゃんが口答えするからよ！！」

と一蹴。

・・・。

なんて奴だ。

男子高校生の食欲を舐めてやがる。

おじさんがEVA弐号機をパンに挟んで口に詰め込む中、空はナイフで目玉を切り分

けて、せっせと口に運んでいる。

「さすがに4玉ともなるとキツイよお・・・」

ほれ、言わんこっちゃ無い。

ここは助け舟もとい、略奪行為に出るとするか。

「なんだったら、俺が食ってやっても良いんだが」

その言葉を待ってましたといわんばかりの空。

なんだ、その表情は？

まさか、地雷踏んだか？

創真は身構えた。

「今日が何の日か教えてくれたら、ひとつぐらいあげても良いんだけどなあ」

来た。

絶対来ると思ったけど、案の定来た。

それを言ってしまうえば何か請求されてしまうし、仮に何かをプレゼントしたとしても、請求されてプレゼントしたと思われる。

絶対に答えてたまるか。

「・・・さあ、何だったかな」

創真はあえて白々しく答えた。

「もう、おにいちゃんの意地悪っ！！」

じゃあ、お父さんは解るっ？！」

「昔付き合った女の誕生日だったら全て覚えているんだが」

絶対とぼけている。

「だが、しかし、こんなものを持っている」

それは神戸ハーバーランドの煉瓦倉庫レストランで使える食事券だった。

いくら何でもポイント高すぎだぜ。

創真は驚愕する。

「俺は残念ながら、今日から仕事で暫く泊まりがけとなってしまう。

デートがてら二人で行ってくと良い。」

「ありがとうお父さん！！！」

とおじさんに抱きつく空。

「もう結婚出来る歳になったと言うのに、まだまだ子供だな、空は。

俺がいない間に二人して大人の階段を登っても良いんじゃないか」

「えっ・・・?!」

思わず顔を見合わせる創真と空。

無表情の創真に対して、空は大きな目をますます大きくして耳まで真っ赤にしている。

「そいつは冗談きついで、おじさん」

「そ、そうよ！！」

「こんな色気の無い奴と、過ちなんか犯しようが無いぜ」

「お兄ちゃんの馬鹿あ！！」

ぱあん！！

派手な音とともに創真の頬に真っ赤な手形が残っていた。

「罰としてお兄ちゃんは本当にご飯無しなんだからねっ！」

と言って、食べかけの目玉焼きも食器ごと取り上げられ片付けられてしまった。

「お、俺の二個玉焼き・・・。

なんだって言うんだ・・・」

創真の腹が鳴り響く。

「全く鈍すぎるのも罪というもんだな」

とおじさんが苦笑する。

「はあ」

空が台所でカチャカチャと洗い物をする音が聞こえる。

「若さと言うものは時に己の気持ちに盲目にさせるものかも知れない。

過ぎ去って自分の本当の気持ちに気がついた時には既に遅いと言う事もある。

自分の気持ちに素直に生きてみると良い。

まるで世界の中心に立って神にでもなった気分にもなれるものだぞ」

「はあ」

創真はテレビを見ながら考え続けた。

自分の気持ちか・・・。

・・・。

脳裏に過るのは何時も夢で見る戦いの事、そして、あの少女の事だ。

「お兄ちゃん、学校に行くよおー！！」

空の声で創真は我に返った。

いつの間にかに時間が経過し、空は食器洗いや準備を終わらせ、おじさんは出勤してしまったらしい。

「もう、そんな時間か？」

「まったく、お兄ちゃんったら、いっつも寝ぼけているんだからっ」

「はあ」

創真はベランダを通り、自分の家へと向かう。

鞆と靴を取りに戻る為だ。

ふと、眼下を見下ろすとおじさんの22Bが、海に浮かぶ街の方へと走り出す姿が見えた。

遠目から眺めるとその動きはスローモーションのようで、まるで夢の中にいるかのようだった。

俺が寝ぼけてるって？

まったくもってその通りさ。

神戸は北側に山、南側に海があり、その間に街が広がっている。

最も山に近い方から阪急神戸線、東海道本線、阪神電鉄本線と東西に走る三つの電車が主要の移動手段となる。

創真達の暮らす県営団地のある住宅街は東灘区の山沿いにあり、もっとも近い阪急神戸線の駅までも大分離れている。

しかも、傾斜がきつい為、駅への移動・・・特に帰りは困難である。

そう言う立地の住宅街は神戸には沢山あるが、通勤・通学の時間には大量にバスが出ている為に不自由しない。

だが、帰りが遅くなると、電車があったとしても自宅付近まで行くバスが無くなる事があり、タクシーを拾うお金の無い人は地獄の坂を登って帰宅しなければならない。

そうなる事が目に見えていたので、この日はバスと電車で通学せず、バイクで学校の最寄り駅まで行く事にした。

創真は空にヘルメットを渡すと、団地の駐輪所に止めてあるバイクのカバーを取り払った。

黒赤ツートンカラーのハーフカウル付きのマシンが露わになる。

神戸の企業であるKawasakiのバイクでGPZ900R-A2・・・通称ニンジャだ。

創真の親の形見であるらしい。

トップガンと言う映画の中に登場した車両と同じカラーリングの為、映画好きの創真はこのバイクをととても気に入っている。

神戸はその立地から自転車よりも自動二輪が好まれ免許を持っている者も多いが、創真はこのバイクに乗りたいが為に18歳になってすぐに大型自動二輪の免許を取った。

その前は同じくKawasakiの250であるバリオスに乗っていたが、GPZ900の方がパワーがある分だけ二人乗りは遥かに楽である。

軽く暖気をすると二人はバイクに股がり、機械的なエンジン音を上げて駆け出した。

団地のすぐ横、山から流れる川沿いの道を南へと下り、阪神神戸線を超え、東海道本線の少し手前、水道橋交差点で右折し、街路樹の綺麗な広い道路を暫く西に走る。

目指すは阪急神戸線を二駅ほど西に行った駅だ。

駅前には動物園やスポーツセンター、古い洋館等を有する広い公園がある。

駅の駐輪所に着くとバイクを止めようとする学生達の列が出来ていた。

本来、校則でバイク通学は禁じられているが、交通の便が悪い神戸では駅までバイクで移動する学生が後を絶たず、暗黙の了解となっていた。

「おはよっさん！！」

バイクのエンジンを止めて、料金支払いの列を待っていると、後ろから声をかけられた。

kawasaki Z2 750RS・・・通称ゼツツーを押しているのは、赤いバンダナを額に巻いたツンツン頭の少年で、創真のクラスメイトである風間 竜斗（かざま りゅうと）だ。

「なんだ、お前か」

創真は露骨に嫌な顔をする。

まったく、朝っぱらからこいつの顔を拝む事になるとは。

「こないな所までバイクで来るなんて珍しいやないか」

「ちょっと、野暮用があつてな」

「野暮用じゃないもんっ！！」

今日は空のお誕生日記念にお兄ちゃんがハーバーランドに連れて行ってくれるんだあ！！

「良いでしょ！！」

空がぐいっと顔を突き出して言う。

「この野郎っ！！」

エンジンが止まったままのZ2で創真に体当たりする竜斗。

「ぐはっ」

「こないな可愛い幼なじみと一緒にデートを野暮用とは、なんちゅう羨ましいやっちゃ！！」

「もっと言っちゃえー！！」

空の応援に気を良くした竜斗は、顔を赤くしながらさらに創真を攻め続ける。

「このブルジョアぐあっ！！」

俺のような底辺なんて知ったこっちゃ無いって事かい！！

うお————っ！！！！

憎しみで人が殺せたらあっ！！！！」

と血の涙を流さんがばかりに拳を握りしめて滾る竜斗。

「そんなに大げさな事じゃないだろ。」

第一、空みたいなチンチクリンとデートたって嬉しくないぜ」

「お兄ちゃんの馬鹿あ————っ！！！！」

ぱぁんと鳴り響く平手打ちの音。

本日二回目である。

「ぐう、俺が一体何したって言うんだ・・・」

創真はヒリヒリと赤く晴れ上がる頬を押さえる。

「まったく、お前は地雷踏む天才やなあ！！」

呆れ面の竜斗。

我ながらまったくだと創真は思った。

「まあ、喧嘩するのは仲いい証拠やで！！

夫婦喧嘩は犬も食わんって言うしな！！」

夫婦って言葉を聞いて何故か機嫌を取り戻す。

反論したい所だったが、それを言うとまたビンタが飛んでくるに違いないだろう。

だが、あえて言おう。

「誰が夫婦だ」

ぱぁん！！

創真が本日三度目のビンタを食らったのは言うまでも無い。

駅から学校までは徒歩で20分程の道のりだ。

ひたすら北に向けて坂を登り続け、山の麓まで向かう。

新神戸や六甲道駅からはバスも出ているが、場合によってはかなりの時間を要する為、最寄り駅から歩いた方が確実な上に早い。

「みなが寝静まった夜、バイクで六甲山を走っていると、とっても凄いものを見たんやー！！」

「どうせ幽霊見たとか、そういう話だろ」

「な・ん・と、スカイフィッシュやでー！！」

「ああ、テレビの見過ぎで頭悪くしたんだな」

「俺は絶対にっ！！

絶対に嘘なんか言ってないでー！！」

「そんなに言うんだったら捕まえてみるよ。

どうせ、ハエがヘッドライトで光っているだけだと解るだけだ」

「よーし、そんなに言うんやったら、今度の金曜の夜はアレやな」

「アレってなんだよ」

「スカイフィッシュ捕縛ツーリングや！！」

「アホか」

「リヤシートに虫取り網付けて、がぁーって走れば捕まると思うんやけど！！」

「勝手にしてくれ」

「何言ってるんや、あんさんもやるんやで！！」

どっちが多く捕まえられるか競争やでー！！」

「はぁ？」

「Kawasaki Riders' Club Kazamaのメンバーやろ」

「そんないかがわしいクラブに入った覚えはない」

「知らへんのか、Kawasakiに乗っている時点で強制入会なんやで！！」

「Kawasaki買った瞬間にお前のチームに強制入会だったら誰も買わん」

まったく、こいつは何時もヘンテコな競技を考えては、無理矢理な理屈で俺を巻き込もうとする。

延々と続く坂を登りながら、創真と竜斗は一風変わったバイク談義に花を咲かせていた。

創真は1981年1月21日生まれで怪我がなければ、本来大学一年になっているはずの年齢だが、一学年遅れてしまっている。

竜斗も高校一年で出会った時には既に留年していた。

同じ留年仲間と言う事も、趣味が合うと言う事もあるが、それだけでなく妙に気が合っていた。

二人の様子をニコニコしながら眺める空。

先ほどまでの怒りなど既に忘れてしまっていた。

単純明快な性格の空は不機嫌を引きずったりせず、三步でも歩けばすぐに気分を入れ替える事が出来るのだ。

創真もその事を知っているからこそ、安心して毒を吐く事が出来ると言うものだった。

空には創真達の話の内容は全く持って解らなかったが、創真が楽しそうに話している姿を見るのが好きだった。

坂を登れば登る程、同じ学校の生徒が多くなってきて、気がつくともぞろぞろと続く列に入り込んでいた。

他の生徒はビシッと制服を着こなしている、いかにも品行方正な少年少女達ばかりだ。

そんな模範生徒の集団の中では、創真達三人は同じ制服を着ていたとしても異質の存在に見えた。

空と竜斗は底抜けに明るく良い意味で校風に縛られないので皆に慕われていた。

「おはよお！！」

「おはよさん！！」

「・・・」

途中、朝の挨拶がてら声をかけてくる者も多く、空と竜斗はその全てに笑顔で挨拶を返す。

だが、創真は基本的に誰とも挨拶を交わす事はない。

創真は本当の意味で異質な存在であった。

怪我で一学年遅れていると言う事もあるが、それ以上に映画や小説、バイクなど狭い世界にしか興味を持たず、自己と他人を格別して生きている為、現実世界から孤立していた。

そんな創真を快く思わない人々もいる。

例えば生徒会の腕章を付けた男女、創真と同じクラスの男子で生徒会長と、同じく女子で副会長だ。

「おはよう」

空と竜斗に挨拶を済ますと、創真に冷たい視線を浴びせて足早に去っていった。

「はあ、相変わらず偉そうやなあ。

あんさんも感じ悪いけど、あっちも相当なもんやで一」

竜斗は顎を突き出して腕組みし、生徒会役員の二人を目で追う。

「そんな事言ったらお兄ちゃんがかawaiiそうでしょ！！」

おにいちゃんの方がよっぽど感じ悪いんだからっ！！」

と小さな胸を張って正々堂々と言う空。

「それがフォローだとしたら驚愕するしかないな」

やがて長い坂を登り切ると眼前に趣のある建物が現れた。

1938年に竣工された戦前から残る古い建物で、ロンドン塔と呼ばれる塔屋や、銃眼に見立てた装飾等、中世南欧の城を模したロマネスク調建築で、戦時中には陸軍の司令部として、戦後には昭和天皇のご宿所として使用されたりと様々な歴史がある。

神戸有数の名門高校として現代も名を馳している。

それが創真達の通う学校だった。

「まったく、お前みたいな奴が良く受かったよな」

「その言葉そっくりそのまま返すで」

創真と竜斗はお互いに顔を見合わせて苦笑した。

その様子を見て空はニッコリして、後ろから二人の首に抱きついた。

創真は学校にいる間はひたすら寝て過していた。

とにかく、眠くて眠くてたまらないのだ。

夜は長く起きていられないので、毎日早く寝るようにしている。

あの少女と戦いの夢を頻繁に見てはいるものの十分な睡眠時間を取っているはずだが、日中も眠気が取れないのは学校が下らないからだと言っていた。

たまに眠くない時は退屈しのぎに鞆に忍ばせたラノベを読んで過ごした。

二時限目と三時限間の小休止中に、気がつくと言真の前に一組の男女が立っていた

。

四角い眼鏡をかけてややぼっちゃりした男子は生徒会長。

三角眼鏡をかけて三つ編みにしたソバカスだらけの女子が副会長だ。

「・・・誰だお前ら。

ああ、確か生徒会長の小錦に、副会長の人妻だっけ？」

「誰が小錦だ！！ 生徒会長の小泉だ！！」

赤ら顔を更に真っ赤にさせる小錦。

「新妻です」

人妻がシュッと眼鏡を上げるとレンズがキラリと光る。

「三年も同じクラスにいるんだ！！」

いい加減に人の名前ぐらい覚えろ！！」

生徒会長は唾を飛ばしながら激昂する。

「すまん、わざとだ」

侮蔑の眼差しを向けて苦笑する創真。

「なお悪いわっ！！」

今にも飛びかかろうとする小錦を止める人妻。

「小錦さん。

ただでさえ暑いのに、これ以上教室を暑苦しくしないで下さい」

息を荒くする小錦に突っ込みを入れる人妻。

「ああ、すまん・・・。

って、今密かに小錦って呼んだよね？

微妙に馬鹿にしているよね？」

「微妙じゃなくて、馬鹿にしてるんです」

またしても、人妻の眼鏡が光る。

「僕にそういう事を言うと、泣いてしまうからな！」

ぶわっと振り返った小錦の顔は涙と鼻水に塗れていた。

「もう、泣いてますから。

汚い顔を向けないで下さい」

と顔を背ける人妻。

「くっ・・・！！」

ハンカチで涙と鼻水を拭き取る小錦。

「とにかくだ、双間よ！！

お前は禁止されているバイクで通学する、人に挨拶もしない、授業中はずっと寝ているか、本を読んでいるか、生活態度がたるみすぎているぞ！！」

「たるんでいるのは、会長の体です」

ボソッと人妻が呟く。

・・・。

・・・。

・・・。

「たるんでいるぞ、双間っ！！！」

より力を込めて言い直す小錦。

「そんな事で期末試験でこの生徒会長のこの僕のいるクラスの平均点を下げたら許さないからな！！

ただでさえ、このクラスには風間もいて、低レベルだと思われているんだ！！」

「言うておくが、俺も竜斗もお前よりか平均点は上だ」

「えっ・・・？」

「お言葉ですか、小錦馬鹿会長。

本当の事です」

・・・。

「幾ら寝てようが本を読んでいようが、あんたより点数取れていれば問題ないよな」

次の授業の開始を知らせる予鈴が鳴り響く。

「さあ、席に着きましょう」

笑いを堪えながら去っていく人妻。

「・・・お前のような奴はいつか肅正してやる」

小錦は涙を流しながら自分の席に戻っていった。

何の役に立たない授業に真剣に取り組む事が正しいと信じる、品行方正なお坊ちゃん、お嬢ちゃん達。

寝ながらも授業の内容は頭の中に入ってくるし、黒板に書かれている事も前後の会

話の内容と教科書を照らし合わせれば容易に想像出来ると言うのに。

まったくもって下らない連中だ。

そして、創真はまた微睡眠へと落ちてゆく。

永遠に続くかのように思える微睡眠と退屈な時間だったが、気がつくや午前中の授業は終わり昼休みを迎えていた。

学校中の生徒が羽を伸ばして楽しい喧噪に包まれる。

そんな中、ただ一人、創真だけは微睡眠と言う静寂の中で佇んでいた。

この坊ちゃん、嬢ちゃん達は真面目に授業を受けていたと思ったら、昼休みになった途端に騒ぎ始める。

どっちなんだかはっきりしろ。

下らない。

下らない。

下らない。

創真は無意識の内に目で竜斗の存在を探していたが教室にはいないようだった。

そう言えば二時間目の終わりあたりから居なかった気もするが、竜斗が突如として学校を抜け出して、また突如として戻ってくる事はよくあった。

あいつはそういう自由な奴だ。

昼休みだし食事を取りに行ったり、買い出しに行っている可能性もある。

まあ、良い。

一人、昼食も食べずに孤立している創真をせせら笑う声が聞こえる。

小錦と人妻、それから自らをエリートだと思っている数人のグループだ。

下らない。

下らない。

下らない。

朝からろくに食事を取れずに腹は減っていたが、だからと言って飯を買いに行く気にもなれなかった。

こんな下らない世界ならば、寝ていた方が遥かにました。

創真はヘッドフォンで外界の音を遮断し、心地よい音楽から夢の世界へとたゆたう

。

脳裏にあの少女の姿が過る。

夢の中でまた合えるかもしれないしな。

「お・に・い・ちゃん！！」

突然ヘッドフォンが引きはがされ、聞き慣れた声が創真を夢の世界から引き戻した

。

目をあけるとそこにはショートカットで満面の笑みを浮かべた空がいた。

折角人が夢の世界へ行こうとしていたのに邪魔するとは、全くもって無粋な奴だ。

しかも、ここは三年の教室だ。

何故、一年のコイツがさも当たり前のようにここにいる？

相変わらずながら、非常識極まりない奴だ。

「行こ！」

と創真の腕を引っ張る空。

「何処にだ？」

「もうお兄ちゃんったら、お昼って言えば決まっているでしょ」

空に連れられた先は校舎の屋上だった。

澄み切った青空にもくもくとした雲が浮かび、力強く太陽が輝く。

いかにもと言う夏の空。

ロンドン塔が逆光の中でシルエットとなって見えた。

「よっ、待ってたでー！」

床に敷かれたマットの上で竜斗があぐらをかいていた。

その膝元にはコンビニの弁当と、もう一つバスケットが置かれている。

「なんでコイツがいる？」

「なんでって、空が呼んだのよ。」

だって、ご飯は皆で食べた方が楽しいんだから」

「ねー」

と空と竜斗が声を合わせる。

「はあ」

創真と空はマットの上に腰を下ろす。

「はあい、どうぞ！！」

空がバスケットを開くと、サンドイッチが表した。

どうやら、取り上げた創真の目玉焼きや、空の目玉焼きの余りを利用したもののようにだった。

「いただきますあす！！」

竜斗は自分の弁当を差し置いて、創真の前に置かれたバスケットのサンドイッチに手をつける。

「って、何で当たり前のようにお前が食ってるんだ。」

自分の弁当あるだろ」

「コンビニ弁当より美味そうやしなー！！

別にいいやろー！！

減るもんや無いしー！！」

「いや、減るから。

俺の飯は確実に減ってるから」

「おにいちゃんったら、友達なんだしそれぐらい良いじゃないの！」

腰に手を当ててポンプンとしたポーズを取る空。

「友達ってのは人の飯を奪う奴の事を言うのか？」

「口答えすると、またとりあげちゃうよ！！」

創真の前からバスケットを掠め取る空。

「竜斗さん全部食べちゃって良いよお！！」

「俺の飯が・・・」

「ほな、遠慮なく、いっただくでえ！」

イエーイと言わんばかりに獲物を見せびらかす竜斗。

「そこは遠慮しろよ」

創真はふと竜斗の側に置かれた弁当をチラ見しては目を光らす。

「もう良い、お前の飯もらうからな」

創真は竜斗が油断した隙に弁当を奪おうとする。

だが、竜斗は驚くべき反応で創真の方を振り返り、ニッコリと微笑みかける。

「もちろんやで心の友やろ！！

お前のもんは俺のものー！！

俺のもんは俺のもんやー！！」

と言って背中に弁当を隠す。

「それを心の友と言うのはお前とジャ○アンぐらいだ」

空腹に耐えられず、竜斗に直接襲いかかる創真。

「おっ、チキチキ弁当争奪戦の開催やなー」

「また、おかしな競技を作りやがって」

「お兄ちゃんったらケチなんだから」

その様子を見てあきれ顔の空。

「ケチなのはどう見てもコイツだ」

互いに手を組み合ってプルプルと震える創真と竜斗。

「そんなに、褒めんといて！！」

「いや、褒めてないから」

この後はもちろん空お手製サンドイッチ、コンビニ弁当入り乱れての争奪戦になった事は言うまでもない。

創真にとって学校が下らない寝ぼけた場所であると言う事は変わらない。

だが、この二人と過ごす時間。

それだけは唯一色が着いているような気がした。

創真と空は学校が終わるとハーバーランドへと向かった。

かまぼこ状のデザインが特徴のオリエントホテルや、神戸ポートタワーのあるメリケンパークの西にあり、複数の映画館やショッピングセンター、遊園地などが集合している。

学校の最寄り駅から阪急神戸線で5駅ほど西に行った神戸駅が最寄りとなる。

神戸の都市部を東西に横断する場合は電車の方が圧倒的に早いのだが、帰りの煩わしさを考えてバイクで移動し、メリケンパークの駐車場に停めてそこからは徒歩だ。

ハーバーランドに到着した時には、まだ食事まで大分時間があつたので、映画を見て過ごす事にした。

神戸モザイクはハーバーランドの一角にある遊園地と一体化した複合施設で、まるで欧州の町並みのような外観が特徴だ。

1992年にオープンして以来、神戸らしい雰囲気味わえるお洒落なスポットとして、若いカップルに人気がある。

この日も平日だと言うのに大勢の人でにぎわっていた。

公開されている映画でめぼしいものは、ハムナプトラや鉄道屋、恋に落ちたシェイクスピア等だった。

「空は簡単なのが良いなあ」

創真も空の意見に異論はなかったので、迷わずハムナプトラを見る事にした。

ただでさえ寝ぼけた創真がハートフルストーリーや、ラブストーリーを見たら確実に寝てしまう。

映画は単純明快な作品に限る。

しかし、これから先の夏休みになれば、創真が今小説版を読んでいるスターウォーズEP1や、公開前からCGを使ったアクションが話題になっているマトリックス等の注目作が公開される。

その二つはSFものが好きな創真としては気になって仕方がない作品であったが、まだ公開していない以上は仕方がない。

ハムナプトラは平たく言うと古代のミイラと戦う映画だった。

ミイラが蘇るシーンで空は悲鳴を上げて創真の手をぎゅっと握った。

こんな映画で悲鳴を上げるのは空ぐらいなものだと思いながらも、その手を強く握り返した。

なんだろうな、この気持ちは・・・？

創真は自分の中に今まで抱いた事の無い感情がわき上がるのを感じた。

「自分の気持ちに素直に生きてみると良い」

ふと、おじさんの言葉が頭を過る。

俺は一体何をしたい・・・？

そんな事は今まで考えた事が無かったし、考えてもすぐに答えは出なかったが、考えれば考える程、胸が苦しくなるなっていた。

だが、不思議と悪い気持ちでは無かった。

「面白かったねー！！」

「まあ、それなりにな」

二人はモザイクの2階を煉瓦倉庫レストラン方面に向けて、様々な店を眺めながら歩いていた。

「あんな、ミイラに悲鳴を明ける奴はお前だけだぜ」

創真は思い出して微笑する。

苦笑ではなく、微笑だ。

空はその変化を見過ごさず、嬉しくて、嬉しくてたまらなかった。

「もう、意地悪なんだからっ」

と空は創真の腕にくっついた。

頭が真っ白になる創真。

・・・。

・・・。

・・・。

ふと、通りかかりに可愛いアクセサリーを扱う店が目に入った。

・・・。

・・・。

・・・。

そして、敷地から出ようとする所、ふと創真は立ち止まる。

「どうしたの？」

「・・・ちょっと待っててくれ」

「おしっこ？」

「お前な・・・、女の子なんだから言葉使いに気をつけろよ」

「ええっ、なんて言えば良いの？」

「とにかく、少し遅くなるから待っててくれ」

「じゃあ、大きい方ね！」

一瞬言葉に悩んだ後、にっこりと笑って言う空。

むしろ、酷くなっている。

創真は突っ込みたい所だったが、ぐっところえた。

「まあ・・・、そんな所だ」

創真は今来た道を一人引き返した。

「ガンバってねー！」

空はその後ろ姿に手を振った。

煉瓦倉庫は明治時代に作られた煉瓦作りの倉庫を改装されたレストラン街で、暖かみのある光に照らされ、まるでタイムスリップしたかのような気分させられた。

煉瓦倉庫の背後にはポートタワーの上に向かって広がる光のシルエットが闇の中に浮かび上がり、古いものと新しいものが融合した異世界のような情景を作り上げていた。

二人が入ったのは趣のある古いアメリカ風の内装で、パスタのコース料理を中心とした店だった。

「美味しいねえ！」

「はあ・・・」

だが、創真にはどんなに趣ある店の雰囲気だろうが、どんなに美味しい料理だろうが、上の空だった。

「もう、おにいちゃんったら、さっきからそればかりね！」

「あのさ、空・・・」

「なあに？」

無邪気に聞き返す空。

創真は何故だか胸が痛くなり、言葉を続ける事が出来ない。

・・・。

「あんまり、食い過ぎると腹壊すぞ」

「だって、美味しいんだもん！」

と満面の笑みを浮かべて空が答えた。

その余りの笑顔にそれは良かったと創真も頷いた。

・・・が、違う。

創真の言いたい事はそんな事じゃなかった。

なんだかんだ言って、全ての料理を食べ尽くし二人は店の外に出た。

レンガ倉庫レストランの前はウッドデッキになっていて、通り抜ける潮風が涼しく

て気持ちよかった。

目の前にライトアップされたモザイクガーデンの大観覧車がゆっくりと動いている姿が見えた。

「あれに乗ろうよ！」

空が喜んで指差す。

「そうだな」

そう、次こそはちゃんと言うんだ。

二人を乗せた観覧車は徐々にその高度を上げて行く。

始めはポートタワーやかまぼこ状のオリエントホテル等の近い所から見え始め、徐々に期待感が高まって行く。

「うちの方はこっちかなあ？」

待ちきれない空は、あちこち方角を指差しては創真に聴く。

「アホ、そっちは東だから大阪方面だ。」

「うちはもっと北の山よりだぞ」

そうこうやっている内に期待に応えるように北に神戸の街の光が見え始めた。

神戸の夜景は札幌、長崎と日本三大夜景と言われるだけあり、まるで闇の中に宝石を散りばめたかのようで、光と闇が解け合う妖艶な美しさがあり、心を奪われざるを得なかった。

そんな時、男と女と言う物がどういうものであるか、良くわかっていない二人ではあるが、互いを求め合う本能のようなものが二人の手を繋ぎ合わせていた。

暖かさや、汗、触感、互いの存在が、繋いだ手から伝わり、心臓が早鐘を打ち、心がとろけて行く。

頂点付近になると天気の良いだけあり、東の果てには対岸の大阪の光が、西の果てには明石海峡大橋の光がうっすらと見えた。

南には吸い込まれそうな闇が何処までも続いている。

頂上まで来て、互いの顔を見た瞬間に時が止まった気がした。

互いの鼓動が聞こえるのではないかというぐらい激しく高鳴り、暗い室内でも解るんじゃないかと思うぐらい顔が紅潮していた。

繋いだ手はより汗ばみ、熱く燃えるようだった。

今はもう、どんな夜景だろうが、視界に入る事は無かった。

ただ、見えるのは互いの顔だけだ。

ただ、聞こえるのはお互いの鼓動と呼吸の音だけ。

・・・。

どれだけの沈黙が続いただろう。

言え！

言うんだ！

創真は自分でも珍しいと思うぐらい、強く心を奮い立たせていた。

「あのさ・・・」

創真が勇気を振り絞って沈黙を破る。

下に俯き強く拳を握りしめる。

「なあに？」

その時、空がどんな顔をしていたか、下を向いていた創真には想像もつかない。

ごくん。

「・・・間違っても、こんな密室で屁とかすんなよ」

「お兄ちゃんの馬鹿あっ！！」

神戸の夜にビンタの音が木霊した。

言われなくても解っている。

本当に言いたい言葉は出ないのに、悪態が出て来るなんて。

まったく、もって馬鹿野郎だ。

創真と空はハーバーランドからバイクを止めたメリケンパークの駐車場へと歩いていた。

何時もは直ぐに機嫌を取り戻す空も、この時ばかりは下を俯いてぶすっとしていた。

それはそうだろうと創真は思った。

その沈黙は何よりも重く、まるで永遠に続くかのようにだった。

この後も空とは同じ団地に帰り、明日も、明後日も一緒に暮らして行かなければならない。

空が機嫌を直してくれなければ、この辛い時間を永遠に過ごす事になる。

いっその事、永遠に明日が来なければとも思うが、いくら何でも時を止める事等出来はしない。

どうするべきか。

・・・。

そんなのは簡単な事だ。

ただ、一つの言葉を言えば良い。

言え！

言うんだ！

「・・・空が飯を食い過ぎるから、屁が出ないか心配だったただけだ」

「・・・」

何処まで捻くれているんだ、俺と言う男は・・・？

いざ自分の気持ちを伝えようと思うと、思いもしない事を言って人を傷つけてしまう。

そんな自分が嫌で嫌でたまらなかったが、他の誰かになる事なんか出来はしない。

そう、俺はこの世界から孤立した存在であると言う事実からは逃れられないんだ。

空に見放されたらこの世界に俺の居場所等は何処にも無い。

・・・帰りたい。

・・・帰りたい。

・・・帰りたい。

ここじゃない何処かに。

俺の住む本当の世界に。

そうすれば、空もこれ以上傷つかずに済む。

創真が自分の意識を深く沈めていると、突然携帯電話が鳴り響いた。

聞いた事の無いインドの宗教音楽のようなメロディだ。

当然、創真の使うP501iにそんな曲はプリインストールされていないし、勿論、自作曲でも無い。

創真の登録している自作曲はWinter,againと、名もなき詩、Automaticの3曲で容量を使い切っている。

着メロ本を買って苦労して入力したので間違いは無いはずだ。

携帯電話を取り出すとi-Modeメールが届いていた。

差出人はNo.0愚者。

1999年7月1日。

0:00。

メリケンパーク駐車場。

No.VI皇帝。

それだけ書かれていた。

何の事だか解らない。

後数分で日が変わるし、その頃にはメリケンパークの駐車場に着く頃だろう。

メリケンパーク駐車場が見えてくると、異様な雰囲気にもまれていた。

周囲をUnited Brahmoと書かれた黒い帽子とスタッフジャンバーを着用した大勢の人々が囲んでいる。

若年層の男女が多いが、皆一様に無表情であった。

Unitedってのは連合と言う意味だが、Brahmoの意味は解らない。

その異様な雰囲気にも機嫌を損ねた空も恐怖を感じ、創真の袖をぎゅっと掴んだ。

何なんだと思いつつも、創真と空はUnited Brahmoの間を抜けて駐車場の中に入ると、他に誰も居ない駐車場に見知った二つの姿があった。

制服姿のやや太った男子と、同じく制服姿の三つ編みソバカスの女子。

生徒会長の小錦と、副会長の人妻だ。

何が待って居るのかと身構えていた創真と空は拍子抜けした。

「まさか、お前らがNo.XVIIIの月の暗示を浮ける者だったとはなあ！！」

訳の分からない事を言いながら創真達の行く手を遮るように立ち塞がる二人。

「何処の誰だか知らないが、邪魔だ」

創真が毒づく。

「あれ程、毎日注意していたと言うのに、僕の事を忘れたと言うのか！！」

「会長、人はどうしても良い存在の事を忘れるものです」

人妻は眼鏡をくいと持ち上げると、月光を浮けてレンズが鈍く光った。

「そうか・・・って、僕がどうでも良い存在だと言うのかぁ！？」

この生徒会長であり、No.IVの皇帝の暗示を持つこの僕がかぁ！？」

唾を飛ばしながら激昂する小錦。

「お言葉ながら会長。

私も何時も忘れそうになります」

小さな口を歪ませ、笑いを堪える人妻。

「僕にそういう事を言うとおっ・・・！！」

プルプル体を振るわせる小錦。

「こっち向かないようにお願いします。

私は汚いものを見たくありませんから」

「・・・」

暫くの沈黙。

「双間よっ・・・！！

貴様はもう許さぬっ・・・！！！」

「いや、許すも何も、何もしてないんだが・・・」

「ええい黙れっ！

肅正だっ！！

肅正してやっ！！」

涙と鼻水でぐちゃぐちゃになりながらも小錦の目は燃えていた。

そして、唐突に隣に居た人妻に抱きつく。

「きゃあ！！」

空が悲鳴を上げて目を伏せる。

当然、嫌がり抵抗する人妻。

だが・・・。

突然、抵抗を止めて恍惚の表情になる人妻。

二人の唇と唇が重なっていた。

「気持ち悪いよお・・・」

「最悪なものを見た・・・」

・・・。

訪れる再びの沈黙。

「俺達行くから、ごゆっくり・・・」

創真は空の背中を軽く押し、足早に去ろうとする。

一步、二歩、三歩。

歩き出した時、創真のすぐ脇を何か熱いものが疾走した。

チリチリと髪が焼ける。

そして、次の瞬間それは目の前に止められていた車に当たるとはじけ、大きな音と共に爆発した。

「・・・！！」

空の悲鳴が爆音でかき消された。

創真は迫り来る熱風や爆辺から身を呈して空を守る。

「何なんだよっ！！！」

創真は空の肩を抱きながら小錦をにらみ飛ばした。

「これが僕達の戦いだろっ！！」

小錦は口の中に風の固まりを収縮して吐き出す。

それは小型の竜巻のようになり、もの凄いスピードで創真達に襲いかかる。

創真は空を抱えて横に飛ぶ。

その直後に背後にある車が宙を舞い、大きな音ともに地面に落下した。

「まだまだ行くぞお！！」

続いて口からレーザービームのように高圧の水が発射される。

これも直線的な動きなので空の肩を抱いて横に動いて避ける。

だが、その威力は凄まじく、鋼鉄の車をいとも簡単に貫く。

どうやら、口から色々な種類の攻撃を繰り出す事が出来るようだが、全て直線的なので何とか交わす事が出来るが、もし交わせなかったと思うとぞっとする。

「お前の能力はどうした？！

使わないんだったら、どんどん行くぞお！！！」

「何の事だよっ！！」

次は炎だ。

その熱は避けたとしても、肌がジリジリと焼けるようだった。

空がはぁはぁと息を荒くする。

度重なる攻撃によって、空の精神と体力は限界に達していた。

空を連れて何時までも交わし続ける事は不可能である事は目に見えていた。

このままじゃ二人ともやられてしまう。

「空っ！！

俺が奴の攻撃を引き付けている間に逃げろっ！！」

「でも、お兄ちゃんが！！」

「俺一人だったら、あいつの攻撃を交せる！！

その間にぶっ飛ばしてやる！！」

なんて話していると、今度はレーザーのような水が二人の間を通り抜ける。

「きゃっ！！」

創真は冷や汗が体中から吹き出た。

「はっきり言うと、足手まといだ！！

早く行けよっ！！！」

創真は凄い剣幕で空を睨んだ。

空はくしゃっと顔を歪めて泣きそうになるが、唇を噛み締めて背を向けて走り出した。

創真は胸が痛くなった。

だが、これで良いんだ！！

走りながら横に移動して、小型竜巻を交わして小錦との差を詰める。

「役に立たないパートナーだなあ！！

だが、僕のパートナーは違うぞお！！

行けえっ、新妻っ！！

あのアホな小娘を取っ捕まえろお！！」

「言われなくてもそのつもりです」

人妻は眼鏡を光らせると、そのひよろっとした体からは信じられないぐらいのスピードで駆け出した。

それを目で追う創真。

捕まるなよ、空っ！！

「人の心配の前にまず自分の心配をしたらどうだ？！」

次はまた炎だ。

至近距離で交わした為、今までにない痛みを伴った熱さを感じたが、一気にその差を詰めた。

「お前が自分の心配をしろっ！！」

ストレート！！

ボディ！！

フック！！

怒濤の三連発が小錦に炸裂する。

歪んだふくよかな顔から涙がこぼれる。

手刀！！

「うげっ」

膝蹴り！！

「ぐげっ」

肘打ち！！

「ぐうっ」

創真は常に相手の側面に回り込み続け攻撃を浴びせ続ける。

拳に伝わる重みやを感じる度、小錦の涙に歪んだ顔を見る度、創真は自分の中に何かが膨らんでいくのを感じた。

それは一瞬の油断だったのかもしれない。

苦痛に歪み、涙を零すその顔に一瞬笑みが浮かんだ。

しまった！！

そう思った時にはすでに遅かった。

小錦の口からドロツとした土のような物が吐き出され、あたり一面に広がり創真の足を飲み込んだ瞬間に固まった。

「僕の攻撃が直線だけだと思ったのが愚かだったな！！

皇帝に与えられたNo.IVとは四大元素を表す！！

すなわち、僕は火、水、風に加えて土を操る事が出来るんだ！！」

小錦が口についた血反吐をふき、邪悪な笑みを浮かべる。

戦慄を覚える創真。

一瞬にして血の気が引き、心臓が飛び出る程早鐘を打つ。

どくんっ！！

どくんっ！！

さらに脈が速くなって行く。

ヤバいっ！！

ヤバいっ！！

必死に逃げようとするが、足下の土が固くて身動きを取る事が出来ない。

「いい様だなあ！！」

ぺっと創真に向かって唾を吐き捨てる小錦。

「くそおっ！！」

絶望感が創真の全身を貫くようだった。

「僕はなあ、お前が苦しむ様をずっと見たかったんだ！！」

口の中に水の塊が収縮されいくのが解る。

動けない創真にとって、それはスローモーションのように思えた。

あんな、そら・・・。

こんな、そら・・・。

そら、そら、そら・・・。

空との色んな思いでが蘇っては消えて行く。

そうだよな、おれはそらのこと・・・。

でも・・・。

もう・・・。

おそいな・・・。

どうせおれはしぬ・・・。

でもこれでよかったんだ・・・。

おれのいばしょなんてどこにもなかったんだから・・・。

あいつがたすかればそれでいい・・・。

「お兄ちゃああああん！！！！」

空が創真だったもののそばに駆け寄る。

息を荒くした人妻がようやく、空に追いつき羽交い締めにした。

「ばか・・・、なんででもどってきたんだよ」

そう口に出したいと思ったものの声になっていなかったかも知れない。

「だって、空はお兄ちゃんがっ！！」

お兄ちゃんがああああっ！！！！」

空が泣く姿を見て小錦は邪悪に顔を歪める。

その口に特大の炎の塊が生まれつつあった。

「とどめだあ！！！！」

「やめてえ—————っ！！！！」

その時、全てが赤く染まったような気がした。

だが、次の瞬間、小錦の太った体は錐揉みしながら宙を舞っていた。

「か、会長？！」

人妻があまりの突発的な出来事に空を羽交い締めしながら目をパチくりしていると、突然脇腹に大きな衝撃を感じ吐き気を催し倒れ込んだ。

「な、何よっ！？」

目の前にいたのは黒いゴスロリファッションに身を包んだツインテールの少女だった。

空は見ていた。

その格好からは想像も出来ない目にも止まらぬスピードで、炎を発しようとしてい

た小錦の顎にハイキックを浴びせて肥満体をぶっ飛ばし、続いて人妻の死角に入り込み脇腹に体重の乗ったボディブローをぶち込んでいたのだ。

「あらあら、創真さん。

そんなお姿になられてしまいました」

少女は血肉の塊となった創真を見てクスクスと笑う。

その態度に産まれて初めて強い怒りの感情を覚える空。

「わたくし、香夜 姫が助けて差し上げますわ」

薄れかけた創真の視界に香夜 姫（かぐや ひめ）の黒いシルエットが映る。

そう、彼女は何時も創真の夢に出てくる少女であった。

きみは・・・。

次の瞬間、姫は創真の唇らしき所にキスをした。

そこに姫と言う存在を感じる。

創真の中で何かが広がって行く。

それは自分の意識と呼べる領域だった。

本来心の内側にしかあり得ない自分の意識が、姫と言う媒介を通して何処までも何処までも広がって行くのだ。

創真の意識は駐車場、神戸の街、関西、日本、地球、太陽系と止まる事を知らずに拡大し、この世界全てが己の一部であるかのように感じた。

そう、ここは「僕」・・・ソーマの世界。

故に僕の心の力は法則として存在する。

まるで、そうなる事が当たり前のように、飛び散っていた肉片や血が集い、着ていた服も含めて高速で修復されて行く。

そして、何事も無かったかのように起き上がり、不敵な笑みで唇を歪ませる。

二つの瞳は鋭く光り、額の傷は燃えているかの如く真っ赤に光っていた。

その姿を見て、空は怯えていた。

それは良く知った創真ではない、違うソーマだったからだ。

だが、空以上に怯えていたのは小錦と、人妻の二人であった。

「なんでだよっ！！！」

なんで再生するんだよっ！！！」

「それが僕の能力だからさ」

とソーマは不敵な笑みを浮かべる。

「それより遅かったじゃないか、姫」

姫はクスリと笑う。

「だって、ソーマ様あ。

デートのお邪魔をするのはあまりに無粋ってものじゃなくて？

特に初デートだったらなおの事でしょ」

姫は小馬鹿にするようにチラッと空を見る。

ムカッとする空。

「ふっ、その通りだな。

だが、罰は罰だ。

お仕置きは受けてもらうぞ」

唇が不敵に歪む。

「やだ、ソーマ様ったら、エッチなんですからっ！」

姫の白い頬が火照り、手で覆い隠す。

「！？」

進んだ関係を示唆する言葉に空は胸が痛くなる。

「な、なんなんだあ、お前らはあ？！！！」

小錦がプルプル震えて、唾を吐き散らして言う。

「僕かい？」

ソーマは月の浮かぶ空を仰ぎ一呼吸する。

「僕はNo.XVIII、月のソーマさ！」

そのニヒルな笑みにより一層の恐怖を感じる小錦。

「ひいっ！！」

短い悲鳴を上げ、口からウォーターレーザーを発する。

それはソーマの左胸を貫くが、次の瞬間には何事も無かったかの如く傷が塞がっていた。

「なんなんだよっ！！！」

竜巻をソーマに向かって吐き付ける。

それは体を引きちぎらんばかりに絞り上げ全身から血が吹き出すが、全く堪えた様子が無い。

「この化け物がっ！！！！」

そして、最後に炎を吐き付ける。

その火力は凄まじく、ソーマの体を一瞬にして炭化させて行く。

ソーマは地獄の業火を纏いながらも小錦に歩み寄る。

「そう、僕は悪魔だよ。

・・・君にとってのね！！」

小錦の目の前に威風堂々と立ち塞がり、笑みを浮かべるソーマ。

「こうなったら奥の手だぁーっ！！！！」

ソーマの足下に向かって泥を吐き着ける。

「そんな物が僕に効くと思っているのかい？」

それは即座に固まりソーマは自由を奪われるが、全く意に介した様子はない。

その姿に更なる恐怖を感じる小錦。

「姫、マサムネをくれないか？」

「はい、ソーマ様ぁ！」

姫はふんわりとしたスカートをたくし上げると日本刀を取り出し、鞘ごとソーマに投げつけた。

チラッと見えるそのスカートの中にはモーニングスターや、ヌンチャク、果てはマシンガン等の様々な武器が見え隠れした。

宙を舞った日本刀は磁石に吸い寄せられるかのようにソーマの手の中に収まる。

そして刃を抜き構える。

月光を浴びてその刀身が鈍く光る。

「な、何をするんだっ！！！」

「こうするんだよ」

次の瞬間、ソーマは自らの足を片方ずつ切断する。

動脈から勢い良く吹き出る鮮血が小錦の視界を赤く染める。

そして、失った足で一步踏み出すと、次の瞬間には何事も無かったかのように再生して地面を踏みしめる。

もう片方の足も自ら切断し再生する。

「おえっっっ！！！！」

自分に降り掛かる鮮血に、小錦は気持ち悪くなり嘔吐する。

「君は醜いなー」

その腹を思いっきり蹴り飛ばすソーマ。

小錦の腹は波打ち、吐瀉物をまき散らしながらすっ飛ぶ。

「か、会長っ！！！！」

人妻が悲鳴に近い声を上げ、小錦に駆け寄ろうとする。

「あなたのお相手はわたくしですよ」

次の瞬間、姫のハイキックが人妻の側頭部に炸裂し、人妻は泡を吹きながら昏倒した。

そして、目にも留まらぬ早さで人妻のマウントポジションを奪う。

それと同時にソーマも日本刀を投げ捨て、小錦のマウントポジションを奪っていた。

小錦の目が白黒する。

「小泉くん。

君の事は良く覚えているよ。

いつも、僕の事を冷たい目で見ては、大勢で僕を笑い者にしてたよね」

にっこりと無機質に笑うソーマ。

「お前は僕の事を気につけないんじゃないのか!？」

「そんなわけないじゃないか。

こんなにも・・・。

こんなにも愛おしい君の事を忘れるわけないだろ。

今日は僕の愛情を体で教えて上げるよ。

僕の気持ちが少しでも伝われば良いけどね」

「ひいっ————っ!!!!!!」

月夜にマウントポジションで相手を何度も殴りつける二組のシルエットが浮かぶ。

闇の中で笑みを浮かべる瞳と口だけが光っていた。

まるで、二人の悪魔が降臨したかのような光景だった。

それがどれだけ続いた事か。

ソーマはその快感の余韻を味わうかのように月を仰ぎ、邪悪な笑みを浮かべるとその拳を動かなくなった相手に突き立てる。

「これで僕はイクよ」

「もうやめてえ!!!!」

止めを刺そうと振り上げた拳に飛びついたのは空だった。

しばしの沈黙。

原型を止めぬ程顔を腫らし、意識を失った男女が駐車場の舗装の上に転がっていた。

。

その胸から5枚のカードが飛び出し、ソーマの手の内に収まる。

No.4皇帝のカードと、聖杯の4、剣の8、剣の女王、硬貨の5だ。

「まあ、カードも手に入ったし、空がそう言うんだったら止めるとするか」

起き上がって拳についた血を払う。

空は怯えたような目でソーマを見つめていた。

「何をそんなに怯えているんだい？」

ソーマは強引に空を抱き寄せると、有無を言わずその唇に舌を挿入した。

目を白黒させる空。

また沈黙。

空はソーマを突き放して、腕で唇を拭った。

その姿を見てクスクスと笑う姫。

「連れないなあ空は。

ずっと、こうして欲しかったんじゃないのか無かったのか？」

「そうだけど・・・。

そうだけど違うっ・・・！！

空の・・・。

空のお兄ちゃんはそんなんじゃないよお！！！！

元のお兄ちゃんに戻ってよお！！！！」

「僕はソーマだよ。

空のお兄ちゃんさ！」

ニヤけるソーマ。

だが、空の涙を見ると心が痛くなり、気がつく立ち尽くしていた。

どれだけの時間が経っただろうか。

「空・・・」

創真は寂しさを秘めた目で空を見つめていた。

額の傷はもう光っていない。

それは空にとっての創真だった。

創真は気力を使い果たし倒れそうになる。

「おにいちゃん！！」

空はが創真を支えると強く抱きしめた。

そして、月夜に浮かぶポートタワー。

避雷針の上に立つスーツ姿の男は戦いの全てを傍観していた。

闇夜にサングラスが怪しく光る。

極度に疲弊した創真と空は姫の従者の運転するロールス・ロイスのファントムに乗って、二人の住む団地まで送って来られた。

姫はよろける創真を支えて階段を登った。

小柄な体にゴスロリファッションからは想像もつかない怪力であり、創真も俄に信じられない事であった。

仕方がない事とは言え、創真に頼られている姫に嫉妬を覚える空。

誰よりも創真を支えてあげたいと思っているけど力がたりない。

劣等感から唇を噛み締めていた。

姫はそんな空の気持ちが解っていたので、優越感から笑みがこぼれていた。

姫は階段を上がり切ると空の家で創真を下ろした。

「あら、優雅さに欠けるお家なのね」

リビングに置かれた熊のぬいぐるみを見るて嘲笑する姫。

「全体的に安っぽく幼稚ですわね。」

「お金が無いのは仕方ないとして、センスを学んだ方がよろしいですわ」

高笑いする。

「そんなの空の勝手でしょ！

そもそも、この人誰なの？

何で空の家に来ているの？」

「それを説明する為にわざわざ出向いて差し上げたのに、その言い草は無いんじゃないくて？」

「喧嘩すんなよ、ってか何でそんなにいがみ合ってるんだよ」

・・・。

また沈黙。

「そんなのお兄ちゃんが馬鹿だからに決まっているでしょ！！」

「あら、創真さんは致命的に鈍いことですこと」

と二人に怒られてしまった。

また地雷を踏んでしまったらしい。

まあ、怒られた事で場が収まったのでて良しとするしかない。

「・・・こちらのお家にはパソコンがあるってお話でしたね？」

「・・・空の部屋にあるよ」

そして、三人で空の部屋に入る。

空の部屋はカントリー風のリビングから一転して、年頃の女の子らしい明るい雰囲気、清潔感のある白を基調に家具が揃えられていた。

やはり、白いデスクの上に白いウサギの縫いぐるみと、青い半透明のモニター一体型パソコンが鎮座していた。

AppleのiMac 266Mhzのストロベリーカラーだ。

「あら、面白いパソコンですこと」

空はキーボードの電源ボタンを押すと、画面に顔マークが表示されてOSが起動する。

「インターネットに接続して下さいな」

空はちらっと時計を見るが、もうとっくに23時を回っている。

「時間は大丈夫ね」

「なんで時間を気にする必要があるんですの？」

空は信じられないって顔をする。

「夜の11時前にインターネット使うと、電話料金が大変な事になるのよ！」

と言うと空は標準ブラウザであるNetscapeを立ち上げてダイヤル接続する。

ぴーひょろろろーと、珍妙な音がパソコンより発せられる。

「ちょっと、この下品な音を止めて下さらない？」

しかも、何でこんなに接続するのに時間がかかるんですの!？」

「仕方ないでしょ！」

みんなこうやって接続してるのよ！」

「わたくしは専用回線以外使った事ないので、そんな貧乏臭い事は存じませんわ」

姫が知っていてわざわざ馬鹿にしているんだと気がつき空はムカッとした。

「繋がったよ!!」

「わざわざご苦労様です事。」

代わって下さらないかしら」

と言う前に強引に空から席を奪う姫。

目にとまら止まらぬ高速タイピングで、アドレスバーに何かを入力する。

そして、画面には何の変哲も無い検索サイトが表示される。

その検索欄にまた何かを入力すると、次に出て来たのも検索サイト。

そんな事を何度か繰り返すと、真っ黒が画面にProhct Worldと書かれている。

そのタイトルをクリックすると、次の画面に何らかの結果表が現れた。

No.XVII The Moon VS No.IV The Enperor

The Moonにはマル、The Enperorにはバツが付けられている。

「これは？」

そう、たしかあの小錦は自らの事を皇帝と名乗り、またもう一人のソーマは月を名乗っていた。

創真は霞がかったような戦いの記憶を思い出す。

夢を見ているような状態であったが、創真はあの戦いの全てを覚えていた。

そして、今まで感じた事の無い快感や、充実感を覚えていた。

「そう、あの戦いの結果ですわ」

続いて概要のページを開く。

英文でNo.XXI The Worldへと至る道と書かれている。

それから先は細々としていて解読できない。

「タロットカードはご存知ですわね」

「確か22枚のカードを使った占いよね」

「正確に言うと元々は56枚の小アルカナと、22枚の大アルカナを使ったお遊びが起源ですわ。

宗教学者や心理学者によりますと、タロットとはNo.0である愚者がNo.XXIの世界に至る為の旅の経緯を表しているのでは無いかと言われています。

No.XXIの世界は完全の存在を暗示し、ヒンドゥー教のシヴァや、聖書のアダムに関連づける人もいたそうですわ。

そして、ある人は考えましたの。

タロットとは人が神に至る為の道を示したものであり、宗教における教典の一種なのではないかと。

その人とはこのサイトの管理人であるNo.0の愚者の暗示を持つブラフマンですわ。

彼は人の脳を研究する学者であり、自らの内部宇宙を心を通わせたパートナーとの肉体的接触を通して拡大する事で、脳に秘められた能力を具現化する為の方法を確立した最初の能力者を名乗っていますわ」

「肉体的接触って？」

創真が聞く。

「肉体的接触って言ったら決まっているじゃない事？」

と頬を染める姫。

「まさか、そんな・・・」

モゾモゾする創真。

そんな創真の様子を見てクスクスと笑う姫。

「何を想像したんですの？」

キスに決まっていますわ」

真っ赤になる創真。

「もう、お兄ちゃんったら！！」

・・・。

創真は姫とのキスシーンを思い出し更に顔が赤くなったが、次の瞬間にあの生徒会コンビの最悪のシーンを思い出して一気に血の気が引いた。

「ブラフマンは能力の研究をするうちに、全ての能力がタロットの大アルカナ22枚、小アルカナ56枚の暗示を受けている事を発見したものの、いくら探してもNo.XIXの太陽と、最強であるNo.XXI世界の暗示を持つ能力者とパートナーは現れなかったらしいですわ。

No.XIXの太陽は単純に見つかっていないだけと思われませんが、No.XXIの世界はアルカナを巡る旅の果てに至るものであり、今はまだ存在していないので見つからないのは当然ですわね。

そして、この実験が開始されましたわ。

ここ神戸に暗示を持つ能力者達を集め、占術によって決められた時間と場所と組み合わせで戦わせて、互いのカードを奪い合う事でアルカナを巡る旅を再現し、最後まで勝ち残り全てのカードを手に入れた者が、No.XXI世界・・・つまり神に至ると言う事を証明する事が目的ですわ。

全ての戦いはブラフマン立ち会いの元、ブラフマンの狂信者であるUnited Brahmoによって行われ、超法規的な措置が取られている為、殺人も容認されていますわ」

「酷い・・・」

「そう、非情な実験ですわ。

でも、わたくし達に拒否権は無いのですの。

能力者の脳にはブラフマンによって遠隔操作出来る小型爆弾が仕掛けられている為、指定された時間と場所に現れないと言う事は死を意味しますから」

「そんな事どうやって・・・?!」

空の顔に汗が浮かぶ。

「ブラフマンは優秀な脳神経外科医でもあり、能力者の多くは元々は彼の患者でしたの。

怪我や病気等の治療を受ける際に、宗教儀式を併用した特殊な催眠術により能力を引き出されると同時に、脳に爆弾を埋め込まれましたわ。

まあ、中にはわざわざ実験を志願したり、元々能力を持つ者もいるそうですが」

創真自身も頭に怪我をして治療を受けていた。

恐らくその時に能力を引き出され、爆弾を埋め込まれたのだろう。

「わたくしとソーマ様は長い間その戦いを勝ち抜き、今となっては一番多くのカードを手にした神候補と目されていますわ。

戦いの結果はリアルタイムでこのPCサイトやi-Modeのサイトに公開されます。

基本的に大きな力を持つわたくし達のような大アルカナ同士の戦いは占術によって決定されますが、微々たる力しか持たない小アルカナの場合はサイトを通して、自らの意思で時と場所と相手を選んで戦いを仕掛ける事が出来ますわ。

つまり、勝ち続けると言う事は、それだけ多くの敵に常に狙われ続けると言う事。

ソーマ様はあなたを危険に巻き込まない為に、あなたの日常を壊さない為に、自らの人格と記憶を封じる事であたなを守って来たようですが、その幻想は儚くとも崩れさってしまいましたわね」

空を見て嘲笑する姫。

「・・・そんな」

姫の言う事は全て本当だと創真は思った。

創真は何時も日常生活に対して違和感を覚え続けて来た。

夢の中で繰り返される戦いこそが現実であればと思って来た。

そして、あの戦いの時に感じた快感や充実感。

自分が無意識に押さえ込んでいた気持ちをストレートにぶつける、もう一人のソーマこそが本当の自分なのかもしれない。

「この戦いは避ける事は出来ませんし、これからも続きますわ。

これがわたくし達の現実ですの。

単刀直入に言いますと、わたくし達とあなたは住む世界が違うんですわ。

創真さんの一部分だけを見て全てを知った気になり、自分に都合の悪い部分には目を瞑るしかないあたなに受け入れられる世界ではありませんわ。

あなたを大切に思うソーマ様の気持ちを組んで、これ以降わたくし達に関わらないで戴けませんこと？

それを説明する為にわざわざここに出向いたのは、あなたと創真さんの別れにここが相応しいと思ったわたくしの思いやりからですわよ。

・・・そう、あなたとはこれでお別れですわ」

・・・。

「お兄ちゃんはそれで・・・。

それで、良いの?!」

・・・。

それは唐突な事だったが、創真も心の何処かでそれを望んでいた。

この世界にとって異質な存在でしかない創真を、空は何時も暖かく迎え入れてくれたが、所詮は住む世界が違う。

一緒にいても傷つけるだけ。

危険な目に合わせてしまうだけだ。

空が大切であるからあるからこそ、これ以上一緒には居られない。

「・・・良いも悪いも仕方ない」

「空はそんなの嫌よっ！！」

お兄ちゃんが危険な目に合っているのに何の力にもなれず、見てみない振りをし続けるなんて嫌よっ！！

お兄ちゃんが、またあの怖いお兄ちゃんになって戦うなんて嫌よ！！

このまま別れ離れなんて嫌よっ！！」

空は力強く拳を握って涙を流す。

「それに・・・。

それにっ・・・！！」

空は微笑を浮かべる姫を睨つけた。

「・・・嫌なのよっ！！」

空は吐き捨てるように言うと、次の瞬間はっとなる。

「そうだ、空がお兄ちゃんのパートナーになるよ！！

まだ、太陽の能力者は見つかってないんでしょ！！

空がパートナーになれば、もしかしたらお兄ちゃんが太陽の能力を手に入れられて、一緒に戦えるかもよ！！」

空の今までの非常識の中で最も非常識な発想だった。

「・・・そんな事、出来るわけないだろ」

「空さんたら、面白い事を言いますわねえ。

一人が複数の能力を持つのは前例がない事ですわよ。

もし、それが出来たらソーマ様は太陽と月の力を持つ最強の存在、まさしく神と呼ぶのに相応しい者になれるすわ。

まさしく、世迷い言ですわね」

「空にとってお兄ちゃんはそれだけ大きい・・・」

「空・・・」

「さあ、創真さん。

わたくしと一緒にいきましょう。

わたくし達の住む世界へ」

創真は姫に背中を押され、部屋を出るように促された。

創真は一瞬立ち止まって呟いた。

「さようなら、空」

「馬鹿・・・」

その言葉は今まで空が発した同じ言葉の中で一番重く、創真の心に突き刺さるようであった。

それは誰もいない教室。

創真は独り机に座って小説を読んでいる。

「いつも小説ばかり読んでそんなに面白いもんかよ！」

「オタクなんだろ、オタク！！」

そんな創真をあざけり笑う声が聞こえる。

顔は動かさず目だけで周囲を探るが誰もいない。

そこにあるのは不快な笑い声をあげる無数の影だけ。

創真は小説を読み続ける。

「なんだよ、現実に興味ないふりして、ちゃっかり気にしてるんじゃないか！！」

「だっせーっ！！」

次第に大きくなる声に創真は顔をしかめる。

バンと小説を机に叩き付けると、鞆からヘッドフォンを取り出して音楽をかける。

「都合が悪くなるとそうやってすぐに逃げ出す！！」

「ヘタレだぜ！！」

いまだに聞こえる笑い声。

「なんでこんな奴がこの学校にいるんだよ！！」

「というか何で生きているんだよ！！」

机に突っ伏し目を瞑る。

「いい加減、消えてくれるといいんだけど！！」

「いても意味ない存在だし！！」

腕で頭を覆い隠す。

不快な笑い声は大きくなり、それはノイズのように創真の心に突き刺さる。

誰か・・・。

誰か助けてくれ・・・！

創真は半身を起こして教室を見渡す。

影だらけの教室の片隅に竜斗の背中を見る。

「竜斗！！」

彼を呼ぼうとするが、まるで幻影のように消え去ってしまう。

再び机に突っ伏す。

「お兄ちゃん！！」

いつまでも寝てちゃ駄目よ！！」

空に呼ばれた気がして飛び起きる。

そこには太陽のような笑顔を浮かべた空がいた。

「空っ！！」

創真は空の手を掴もうとするが、その手は何も掴む事は無く、そこには誰もいなかった。

「クズの友達や年下の女の子に助けを求めるなんて、恥ずかしくない？」

「しかも、見捨てられているし！！」

「どうせ、何時も自分が助けられているのを棚にあげ、冷たくあしらって嫌われたんだろ！！」

「キングオブクズだな！！」

俺だったら死を選ぶぜ！！」

・・・。

・・・。

・・・。

「黙れ・・・！！」

創真は机を蹴飛ばすと目を見開き立ち上がる。

「お前らに俺の何が解るっ・・・！！」

影がざわつく。

殺してやる・・・！！

殺してやる・・・！！

殺してやる・・・！！

「お前ら全員、ぶっ殺してやる・・・！！」

目の前にいる影の首を絞める。

創真の指が細い首に食い込んで行く。

それは生身の確かな感触。

「・・・やめて下さい！！」

・・・。

「・・・止めて下さいな、創真さん！！」

ガンと頭に強い衝撃を浮けて創真は目が覚めた。

そして、目の前には一糸まとわぬ姿となっている姫がいた。

はっとして自分の姿を見ると自分も裸であった。

そこは見慣れぬアンティークな洋室。

天蓋付きのキングサイズベッドで創真と姫と二人並んでいた。

夜が遅かったせいもある。

誰も起こさなかったせいもある。

一緒に寝ていた姫が夜型人間だと言う事もある。

創真が起きた時にはすでに昼前だった。

創真と姫は朝食権昼食を外食する事にした。

姫の自宅は中央区北野町にある古い洋館であった。

重厚な煉瓦造りの外観と尖塔の先に取り付けられた風見鳥が特徴的だ。

玄関前にはあのロールスロイス・ファントムが待ち構えていた。

日光の中で少しの澱みもなく艶やかに光っている。

運転手が空から傘を受け取ると、ドアにある傘入れに収納する。

二人は並んで後部座席へと乗り込む。

車内は空の部屋の天蓋付きベッドと同様、レースの付いたヴェールに覆われている。

。

走り出しても走っていると言う感覚も殆どない程静かだった。

「わたくしに相応しい優雅な車で御座いますよ？」

「流れる音楽もクラシックだし、イメージ通りって感じだな」

「あら、他の音楽も聞きます事よ」

姫がセンターコンソールのオーディオを操作すると、

ゴシックな雰囲気ロックが流れる。

MALICE MIZERの月下の夜想曲だ。

MALICE MIZERのファンは姫のようなゴスロリファッションを好む事で知られている。

「どう、意外で御座いますよ？」

「イメージ通り過ぎて、ある意味で意外だな」

姫の事を俗世からかけ離れた本物のゴスロリだと思っていたのだが、意外と俗っぽい所もあるのかも知れない。

そもそも、本物のゴスロリが何かすら解らない物ではあるが。

二人は元町の中華街の高級中華料理店で、一室を貸し切って小籠包で飲茶を楽しんだ。

まともに料理を楽しむ所ではない空や竜斗との食事とはえらい違いだ。

「さて、お腹も満たされた事ですし、お仕事でもするのでしょうか」

姫は食事の余韻を楽しみながら言う。

「はあ、仕事？」

「当然ながら創真さんにもわたくしの仕事を手伝っていただきますわ」

「何で俺が？」

「あら、一宿一飯の恩をお忘れになられて？」

正確に言うと一宿一飯一女ですわ。

私のお家も、ここの食事代も、そして私自身もお安くなってよ」

「ぐむっ・・・」

「働かざる者食うべからずですわ。

いくら創真さんでもタダ飯食わすつもりはありません事よ」

にこっと笑って言う姫。

謎の人物である姫の仕事となると凄く恐ろしいものがある。

だが、文字通り一宿一飯一女の恩があるのは確かだ・・・。

「仕方ないか・・・」

二人は創真のバイクを止めっぱなしにしているメリケンパークからもほど近い、中央区海岸通の一角にあるビルへとやって来た。

もともと大正時代に立てられた近代建築物なのだが、大震災で破損してしまった為、現代的なビルの上に元々あった建物の外壁を再構築している。

4階部分までは古い外観なのに、そこから上は現代のビルと言う、なんとも奇妙な建物である。

そのビルの中に姫のオフィスがあった。

「お待ちしていました社長」

眼鏡をかけて七三分け。

いかにも有能そうな青年秘書が頭を垂れる。

こいつ、社長なのか・・・？

創真は驚愕の目で姫を見る。

事務所の内装は近代的なビルでありながら、マホガニーの壁で仕切られ、クラシックな内装に変更されていた。

社長室に通されると姫は革張りの豪勢な椅子に腰掛け、創真はその隣でちょこんと立つ。

なんだか肩身が狭い思いだ。

「例の件の調べは進んでます事？」

「ええ、架空の口座を複数所有する為、金銭の流れを把握する事は難航しましたが、不鮮明な金銭の流れがある所を全て調べた結果、最近になり多額の寄付金を得ている福祉法人を見つける事が出来ました」

「その寄付金はどう使用されているか解ります事？」

「いえ、今の所は通常が必要となる経費以外には使用されていない模様です」

「とは言え、福祉法人への寄付は裏金の隠れ蓑としての常套手段ですわ。

限りなく黒に近いですわね。

その福祉法人はわたくしが直接視察しますわ」

「では、社用車の運転は私が・・・？」

「いや、車の運転はこちらの方にして戴きますわ」

と姫は創真を見て微笑む。

俺かよ・・・。

って、結局仕事って運転者なのか？

「あなたは引き続きその福祉法人について調べて下さいまし？」

「かしこまりました社長。

では、お気をつけて」

ビルを出ると先ほどファントムを運転していた運転手が頭を垂れて待っていた。

だが、ビルの前に止められた車はファントムでは無い。

黒く艶やかに輝く地を這うようなスタイリングのボディ。

力強く角張ったヒップライン。

そして、天に向かって跳ね上げられた二つのドア。

ボンネットに輝く暴れ牛のエンブレム。

「ランボルギーニ・ディアブロじゃないか・・・」

「そう、これがわたくしの社用車ですわ。

あなたにはこれを運転してもらいますわ」

「マジかよ・・・」

憧れのスーパーカーに乗れるのは嬉しいが、これを俺が・・・？

「大丈夫ですわよ」

創真はファントムの運転手にドライビンググローブを渡され、靴に金属の板を取り付けられると、サイドシルに手をかけコックピットへと滑り込む。

シートはタイトで包まれるような感じだ。

クラッチは重くて体重を乗せてようやく踏み切れる程だ。

油断すると跳ね返ってくる。

「では行きます事よ」

「・・・」

創真はドキドキしながらアクセルを踏むと、爆音と共に回転数が必要以上に跳ね上がる。

ま、マジかよ・・・。

そんな創真の様子を笑いながら見る姫。

「あら、何だったらわたくしが自分で運転しましょうか？

16歳ですから当然免許は持っていませんけど、あなたよりかは遥かに上手だと思いますわ」

コイツは・・・。

色々と文句を言いたい所だが、一宿一飯一女の恩があるのでグッと堪える。

「やってやるよ・・・」

先ほどよりも大分押さえ気味でアクセルをふかしクラッチを離すが、予想以上にミートポイントがシビアなので、急に動力が繋がりに蹴飛ばされるように発進した。

まさしく暴れ牛・・・。

加速、減速どれを取っても過敏だが、特に凄いのは旋回だ。

自分を中心にそのまんま方向を変えるような感じで、下から上へと斜めに強烈な重力がかかる。

駄目だ、マジ怖い・・・。

「創真さんだったらこの車も簡単に乗りこなす事が出来ますわ」

「何を根拠に・・・？」

「車の運転に最も重要な物は、感覚とそれを車に伝える反射ですわ。

あなたの体には既にソーマ様を通して車の運転必要な感覚と反射が形成されているはずですよ」

確かに運転しているうちに、それが当たり前にこなせるようになって来た。

「それに異能力の発現には高次元での空間認知が必要となるので、大アルカナの暗示を持つあなたは感覚が優れているはずですよ。

あなたの部屋をイメージして下さいな。

例え夜に電気が消えていたとしても、何処に何があるか無意識に認知してなくて？

」

まあ、寝ながらティッシュを取り、それをゴミ箱に捨てる等は朝飯前だ。

何をはするかは聞かないでくれ。

「それをもっと広い視野に拡大するとどうでしょう？

部屋にいる時と同様に車、タイヤ、道路、他の交通、空気、刻一刻と流れゆく全ての事象の中心に、自分自身を感じた時、その車はあなたの手足となって動きますわ」

創真は心を落ち着かせ、意識を拡大する。

アクセルに呼応するエンジン音を感じる。

背中に重力を感じる。

ハンドルを握った手、シートに固定された腰、フットレストの左足、アクセルを踏む右足からタイヤの食いつくのを感じる。

自分の視界、サイドミラー、ルームミラー全ての情報が合わさって、まるで創真が360度の視界を得たように感じた。

遙か前方で歩行者信号が変わって行くのを感じる。

慌てて右折しようとして対向車線の車が発進するが、直進する車は急に止まれずその車の側面に衝突する。

続けて後ろ二台の車が玉突きする。

そんな流れがゆっくりスローモーションに見える創真。

この車だったら余裕で止まる事も出来るが、対向車線には一切の車は来ていないし、加速すれば信号が変わる前に渡り切る事が出来る。

右にハンドルを切ると右斜め下から左斜め上へと、凄まじい重力が発生し、対向車線へとレーンチェンジする。

そして、アクセルを踏み切るとエンジンがうなりを上げ、二人の体はシートに押し付けられる。

気がつくと事故車両をあっという間に抜き去り、信号が変わり切る頃には元の車線へと戻っていた。

「なんだ、思った通り動く良い車じゃないか」

創真は呟いた。

「そう、これは車の運転だけで無く、様々な事に通じる基本ですわ。

覚えて置いて損は無い事よ」

「そのグループは少年少女を末端として使い、ネットオークションで実態の無い商品売りさばき不当な利益を得ていますが、ネット犯罪に関してはまだ警察も対応出来ないのが現状で、相当な額を荒稼ぎしているんですわ」

創真達の乗ったディアブロは海岸に近い道を西に走る。

目的地へと向かう道中、姫は創真に仕事の説明をしていた。

「・・・で、それを捕まえるのが今回の仕事ってわけか」

「でも、勘違いしないで下さいませ。

わたくしは正義の味方なんて一銭の得にも成らない事はしませんわ。

当然、誰かがお金を出すからこそ、やっているんですから」

「そのクライアントは警察ってわけじゃないんだろ？」

「時には警察から依頼される事もありますが、今回はマフィアと呼ばれる方々です事よ。

どうも、そのグループが得た利益で力を付けるのを警戒しているらしいですわ」

「・・・やっぱりな。

いくら一宿一飯一女の借りがあるからって、これは過剰返済じゃないか？

利率が軽く30%超えてるぜ」

「あら、失礼しちゃいますわ。

これは大サービスです事よ。

本来、こんな雑用で返済出来る借りでは無くてよ」

「どんだけ、お前は高いんだよ」

「あら、聞きたくて？」

「いや、具体額言われてもマジで困るから」

「いくら、マフィアからの依頼とは言え、結果的に市民にあだなす犯罪グループが潰れるんですもの。

それで納得して貰いますわよ」

「まあ、仕方ないか・・・」

二人がたどり着いた所は長田区駒ヶ林にある古い建物だった。

建物に取り付けられた脱出用の螺旋滑り台や、庭に設置されているジャングルジムから児童施設だと言う事が解る。

「ここが・・・？」

「ええ、隠れ蓑にされている可能性のある福祉施設・・・。

どうやら、孤児院のようですわね」

門の横に見慣れたKawasaki Z2 750RSが止まっている。

・・・。

門扉の鉄柵から中を覗き込むと、玄関の所で車椅子の少女を前に、女性職員や子供

と会話している赤バンダナのツンツン頭が見える。

・・・間違いない竜斗だ。

「あら、お知り合いですの？」

「ああ、学校の悪友だ」

しばらく会話をするとう竜斗は門に向かって歩き出した。

「隠れましょ・・・」

創真達は急いで隠れて、竜斗がZ2に乗って立ち去るのを見送った。

「なんであいつがこんな所に・・・」

「まあ、お話を聞いてみましょう」

「ああ・・・」

二人は敷地に入ると、先ほど竜斗と話をしていた女性職員と目が合った。

「あら、何か御用かしら？」

「ああ、少し話を聞かせて欲しいんだけど」

「あなた・・・」

ひょっとしたら、創真君でしょ？」

「え、ああ、そうだけど・・・」

「やっぱり！！」

同じ制服を着ているし、竜斗に聞かされていた通りのイメージだわ。

じゃあ、となりの子は幼なじみの空ちゃんかしら？」

姫はむすつとする。

「空さんと一緒にされるとは心外ですわ！」

わたくしは姫。

この方の真のパートナーですわ！」

「・・・空ちゃんって可愛い幼なじみがいるのに、他の子と一緒にいるなんて、創真君って噂通の女に不自由しないブルジョア野郎なのね」

「あいつ、こんな所でもそんな事言ってやがったのか・・・」

「あの子に会いに来てくれたの？」

「いや、違う。

これは偶然だ」

「そうなの？」

不思議な縁もあったものね。

こんな所じゃあれだから、中に入ってお話しましょう」

女性職員は車いすを押しながら建物に入る。

創真はそっと手を化する。

「その子は・・・？」

車椅子に乗った少女は空や姫と同じぐらいの年齢で、体中に管を付けられ意識が無いようであった。

「竜斗の幼なじみで堀江 夕鶴って子よ。

竜斗と同じく震災孤児なんだけど、震災で頭に怪我をして、まだ意識が戻らないのよ」

あいつ、震災孤児だったのか・・・。

食卓に座って話を続ける。

「竜斗さんはよくここに来るんですの？」

「ええ、孤児院で保護を受けられるのは18歳、または高校卒業までで、留年しているあの子は18歳になった半年ぐらい前に、ここを出て行って一人暮らしをするようになったんだけど、それからほぼ毎日来てくれるわ。

子供達に会いに来てくれるってより、この子に会いに来ているみたいね」

・・・。

創真は自分の知らない竜斗を知って顔を顰める。

「その顔だと、知らなかったのね」

「・・・ええ、まあ」

「あの子は人付き合いが不器用なのよ。

震災で怪我を負い、家族を亡くし、幼なじみの夕鶴の意識も戻らず、心に深い傷を負ったせいもある。

それに、人並みはずれて頭が良いので、同じレベルで気持ちを通じ合わせる事の出来る友達も出来ずに孤独だったのよ。

なにせ、頭が良いのに学校に行く気を無くして、留年してしまった程だもの・・・」

そんなに繊細な奴だったのか？

「でもね、一度留年してから、あの子は笑顔を見せるようになったわ」

「えっ？」

「そう、創真くんあなたに出会ってからよ。

あの子、いつも言ってたわ。

学校で俺と似たようなもんがおるんやって」

創真には女性職員の言葉が竜斗がそのまんましゃべった言葉のように聞こえた。

「俺と同じように震災で傷ついてるはずやけど、シレっとした顔をして知ったことか

言うて、そいつなりに頑張ってるんや。

俺と同じぐらい頭も良くて、俺と同じぐらいバイクの運転も上手くて、俺と同じぐらい顔も良いんやで一。

でも、女に不自由しないブルジョア野郎なんやで一。

空ちゃんって可愛い幼なじみに慕われてるのに、迷惑面してからに一。

ほんま、贅沢なやっちゃーで一。

ああ、思い出したら腹立ってきたわー。

とやかく、あいつと居ると楽しいんやー」

創真は目頭が熱くなるのを感じた。

「ありがとね、あの子に元気をくれて・・・」

女性職員が涙を流しながら創真の手を握る。

創真は涙を我慢する。

「ああ・・・」

「感動的な場面に水を差すようでようで悪いんですが、竜斗さんがここに来る時、何か持って来てませんか？

例えばお金のような」

「姫・・・！」

「創真さん、私達はそれを聞きに来た事をお忘れになられて？」

「・・・」

おしゃべりな女性職員は黙り込む。

「その沈黙は肯定と捉えてよろしくて？」

「・・・ええ、あの子はお金を持って来てくれるわ。

それは寄付金なの。

この施設は竜斗や夕鶴と同じような、多くの震災孤児を受け入れて来たわ。

でも、震災孤児への寄付金が集まったのは最初の半年だけ。

テレビ報道がされなくなった途端に、人々はまるで完全に復興したかのように思い、寄付も止まってしまったの。

そのせいでここ数年は運営も苦しく、子供達を守れるかどうかの瀬戸際に立たされて来たわ。

竜斗はその事を気にして、来る度に多額の寄付を持って来るようになったの・・・

。

受け取れないって言っても、振り込みするだけだって言うし・・・。

もちろん、高校生で一人暮らしをしている子が稼げる額では無い・・・。

何をしているかは教えてはくれないし、心配でたまらないの・・・」

「そうか・・・」

「あなた達はそれを調べに来たのね・・・」

「・・・ええ、そうですわ」

「ならば、もしあの子が何か悪い事に手を染めているならば・・・。

友達として止めて欲しいの・・・」

二人は女性職員に見送られ施設を後にした。

「・・・竜斗がしているのは単に寄付だ。

これで、ここが犯罪利益の隠れ蓑になっている線は消えただろ・・・。

なあ・・・、帰らないか？」

「・・・確かに当初の読みからは外れてしまいましたわ」

「それじゃ・・・」

「でも、だからと言って、あなたの友達が持ってくるお金の出所は解っていませんわ」

「竜斗は犯罪なんかと関係ない！」

創真は珍しく、声を大にして言う。

「友達を信じたいあなたの気持ちも解りますわ。

でも、それは現実逃避に過ぎません。

あなたの友人は今回の事件とは関係有るかもしれないし、関係無いかもしれない。

どんな結果であろうとも友達ならば浮け入れるべきでなくて？

それにあの女性の方に頼まれたのでしょうか？」

「・・・ああ。

解ったよ、あいつを調べよう・・・。

どうせ、関係ないって解るだが、それを確かめてやる・・・」

「上等ですわ」

「ではさっそく動くとしましょう」

ディアブロのコックピットに搭乗すると、姫はスカートをたくし上げ、中から黒い小型の端末を取り出す。

その瞬間にチラッと恐ろしい武器の数々が見えて違う意味でドキッとする創真。

「それは・・・？」

「WorkPad・・・IBMのPalmOS端末ですわ。

タッチパネルで操作出来る小型PCと違って下さいな」

姫はWorkPadに携帯電話を繋げて操作する。

「シャープのアイゲッティの仲間か。

俺もあれは買ったけどあんまり使ってない。

この手のモバイル機器は斬新だが、流行った試しがないな。

今後も流行るとも思えんが・・・」

「まあ、満足に通信回線を使う事の出来ないローエンドユーザーは、モバイルに目が向かないのも当然ですわね」

「ああ、油断すると通信費で破産するからな」

「今はまだハイエンドユーザーだけのものですが、そのうちモバイルが当たり前になる時代も来ると思いますわよ」

「仮にそうだとしても、タッチパネルだけは絶対に流行らないね」

「では、賭けをしましょうか？

掛け金は1億3000万でよろしくて？」

「なんだよ、その金額は？

万が一負けたら、宝くじでも当てない限り、一生奴隷決定じゃないか」

「あら、この仕事を最後まで手伝って戴けたら、成功報酬で余裕で返済出来ます事よ。

あなたの一宿一飯一女の借りに比べたら遥かに安いもんですわ」

「・・・どうりで社用車がディアブロなわけだ。

しかも、そんな高額な報酬でも全然足りないって、お前の価値って一体・・・」

「こうしている間にも加速度的に金利が増えてます事よ。

具体的にお聞きになりたくて？」

「それだけは絶対に聞きたくない」

そうこうしている内に姫のWorkPadに座標と住所が表示される。

神戸市北区有馬858・・・。

「これは・・・？」

「竜斗さんの単車に付けたGPS付き発信器の場所ですわ」

「すると、今竜斗は有馬温泉に居るってわけか」

「アジト・・・ってわけでは無さそうですが、その手の組織が温泉や旅館で会合する様が安易に想像できますわね」

「たしかに目の前に映像が浮かぶようではあるが、幾ら何でもイメージ通り過ぎて逆に怪しくないか？」

「あなたはそう思いたいだけでしょ」

「・・・まあ、その通りなのだが」

「とにかく、あなたには拒否権はありません事よ。

長田からだったら高速道路を使えばすぐに着きますわ」

「高速ってまだ31号線も開通していないはずだし、普通に有馬街道を行った方が速くないか？」

「あら、創真さん。

一般道で300km/h出せるんだったら、わたくしは止めません事よ」

「マジかよ・・・」

「本当に一瞬だったな・・・」

阪神高速3号線から、第二明神道路、阪神高速5号線、垂水JCT、神戸淡路鳴門道、布施畑JCT、阪神高速7号線で有馬口まで・・・。

途中何度か料金所があったが、それ以外はほぼアクセル全開・・・。

普通に走っている車が止まって見えて、その間を平然と縫って行くとはディアブロ恐るべし。

いや、本当に恐るべしは姫の資金力と、俺の運転感覚か・・・。

「しかし、垂水JCTだけは解らん・・・」

創真は何本もの道路が円を描きながら交差する複雑なJCTを思い出す。

今回は正しい道を選ぶ事が出来たが、次回は間違えない自信はない。

「去年開通したばかりで4本の高速道路が交差する日本最大級のJCTらしいですわ。

間違える人も多くいるらしいんですが、焦らず最寄りのインターで乗り直せば良くなくて？」

「いや、そうだが・・・。

ただでさえ重複して高速料金を取られているので、更に無駄金払うのはいただけな

いぜ」

「あら、庶民の感覚は理解できませんわね・・・」

「むしろ、お前の感覚の方が理解できん・・・」

有馬は六甲山を挟んで神戸の北側にあり、西暦600年前後に当時の天皇が行幸したという記録が残り、後の世では豊臣秀吉が戦いに疲れた体を癒したとも言われる歴史のある温泉地だ。

創真達は車を有馬温泉のロープウェイの駅近くにある駐車場に止めた。

古くから有る温泉地はここに限らず道が狭い為、共同駐車場に止めてから、歩いたり送迎車に乗って目的の宿まで移動する事になる。

「あら、あのロンドンTAXIのような送迎車に乗せて頂ければ、目的地に連れて行って戴けるようすわ」

二人は黒の英国風の送迎車に乗り、座標の示した場所までやって来た。

そこは古い趣のある旅館であった。

「ここは大正時代にダンスホールがあった事で知られ、芸術を愛する人々に好まれ度々作品の舞台となった有名な旅館ですわね」

「・・・でも、あいつがいる事に間違い無さそうだ」

創真が見る視線の先・・・、敷地内には竜斗のZ2が止められていた。

「・・・どうするんだ？」

「捜査の基本は聞き込みですわ」

庭掃除をしている老人に近づく二人。

「すみませんこと？」

「はい、なんでございますか？」

老人は手を止めて耳を傾ける。

「わたくし達、あのバイクに乗っている方のお友達なんですけど、今日はこちらにいらして？」

「ああ、そちらの方と同じ制服を着てらっしゃる、赤いバンダナを巻いたツンツン頭の男の子ですね。

何時もの黒服の方々と一緒に来られていますよ」

これですますます竜斗の事件への関与は濃厚になってきた。

「ありがとうございますわ」

姫がにっこり微笑む。

違う・・・。

姫はそんな良い笑顔をするような明るい奴じゃない。

これは悪魔の笑みだ・・・。

創真は背筋が凍り付くような気がした。

「さて、創真さん。

今日はここに泊まるとしましょう」

「マジかよ・・・」

「ええ、聞き込みの次は潜入捜査と言うのは基本ですわよ」

二人は仲居さんに客室に案内された。

ちょうどキャンセルされて開いていたのは一室だけ。

幻の三田青磁と言われる陶器の展示されている部屋だった。

徐々に嗅ぐ畳の匂いや、障子から漏れる明かり、優雅な雰囲気思わず飲み込まれてしまう。

創真は何も言わず座椅子に座り、仲居さんの出してくれた茶をすすった。

こうしている場合ではないのだが、こういう旅館の雰囲気は俗世からかけ離れた異世界であり、現実を忘れて心が癒される。

「雅ですわね・・・」

姫の方を見るとあのドレスを脱ぎ捨て、いつの間にかに浴衣へと着替えていた。

いつものドレスとは違い、小柄な体の線がハッキリと解り妙な色気がある。

しまった・・・。

着替えシーンを身損ねてしまった・・・。

・・・いや、問題はそんな事じゃないな。

創真は心の中でセルフ突っ込みする。

「おまえ、満喫する気まんまんだな・・・」

「恐らく会合が行われるとすれば酒の席でしょう。

その時取り押さえても良いですし、盗聴器を仕掛けても良いですし、まだ時間がある以上はくつろがなければ損ですわ」

「色々な意味で度胸が座っているな・・・」

「・・・と言う事で温泉に行きますわよ」

「何がと言う事だよ。

幾ら何でも満喫しすぎだろ。

と言うか風呂場で顔を合わせたらどうするんだよ？」

「その時はその時で創真さんが取り押さえてくれればよろしくてよ。

うら若き少年同士が一糸纏わぬ姿でくんずほぐれず・・・。

想像するだけで楽しみですわ」

「おい・・・。

気色悪い事言うなよ・・・。

想像しちまったじゃないか・・・」

「・・・という事で行きますわ」

「・・・本当に行くんだ」

創真は仕方なく姫に着いて行く。

「あら、何処まで着いて行くつもりですか？

ここから先は男女別々です事よ」

「ああ、ごめん」

「わたくしはそれでもよろしいのですが、困るのは創真さんじゃなくて？」

「お前も少しは困ってくれよ・・・」

ったく・・・。

脱衣所に行くと、からの籠が並んでいる。

他の利用客はいないようだ。

とりあえず、今は竜斗と鉢合わせと言う事はないようだ。

今はな・・・。

創真は服を脱いで風呂場に行くと、開け放たれたシャッターからは山側の緑が見える。

窓の無い室内で半露天風呂と言った所だろう。

お湯は濃い赤茶色でまったく湯船の中が見えない。

入湯するとつま先から消えて行くようだった。

体の内側からピリピリピリッと何かが进り、思わず声を上げてしまう。

「ぷは————っ。

こいつは効くな・・・」

「まったくですわね・・・」

・・・。

・・・。

・・・。

創真が既に聞き慣れた声のする方を見ると、殆ど意味を成さない低い敷居の向こうに、肩から下を湯に浸けた姫がいた。

「うわ————っ！！

なんでお前がここに居る！！」

「なんでって、ここは敷居で仕切られているものの、男女が顔を見合わせて入れる半混浴らしいですよ」

目を背けようとするが、白い肩が眩しすぎて、思わずチラチラと見てしまう。

「紳士としてそんなに女の肌を見る物でなくてよ」

「いや、スマン！！」

創真は背を向ける。

「でも、わたくしと創真さんの仲ですもの。

何だったらわたくしの美しい肩から下も存分にご覧になってよろしくてよ」

ザブンと立ち上がる音が聞こえる。

「いや、マジでいいから！！」

とは言うものの気になって仕方ない創真であった。

こっちは全然見られても良いのだが、そこに裸の女の子がいると思うと凄く恥ずかしい。

ドクンドクンと心臓等が脈動し、湯船につかっている事もあっての逆上せそうになる。

これは若い男にとって体に毒な温泉だ・・・。

・・・。

・・・。

・・・。

ちらっと、後ろを振り向くと、微笑を浮かべた姫がいる。

何時も夢に出てくる姫に対して長い事憧れて来たが、こうして現実に出会い、情も交わし無駄口も叩き合える仲にもなった。

この短い間にすっかり当たり前の存在になってしまった姫だが、こう言う場面になると何を話して良いんだか解らないものだな。

沈黙が痛い。

「こういうのも良いものですわね」

「ああ・・・」

姫が発した言葉で思い空気が取り払われた気がした。

「ソーマ様とは何時も戦いをご一緒にして、何度も情の赴くまま夜を重ねましたが、それは夜が明ければ醒めてしまう、甘い夢のようなものでしたわ。

でも、今あなたと過ごす時間は、醒める事のない現実で、望みさえすれば手も届きますわ・・・」

姫は低い敷居越しに後ろから創真の首に抱きつく。

滑らかな肌や柔らかい二つの胸の感触が背中に伝わってくる。

創真の鼓動は更に速くなる。

「しばらく、こうして居させて下さいな・・・」

「姫・・・」

夢に見たあの女の子が今ここに居て、触れる事が出来る。

俺も同じ気持ちさ・・・。

創真は姫の小さく可憐な手を優しく握る。

虫の音が夕暮れ時を教え、周囲が黄昏色に染まって行く。

少し冷たい夕風がサラサラと木の葉を鳴らしながら、二人の火照った肌を優しく包んだ。

「・・・さて、そろそろ出るか」

先に切り出したのは創真だった。

猛るものが収まったものの、いい加減に逆上せそうであった。

創真が脱衣所の所まで行くと、湯煙の向こう側に人影が見える。

結構背が高い・・・。

ツンツン頭で額に赤いものが見える・・・！

まさか・・・！

創真が身構えていると、湯煙が晴れてその全容が明らかになる。

「兄ちゃん、ワイになんかようか？」

創真はずっこけた。

同じ髪型で赤いバンダナをしているものの、竜斗とは似ても似つかない中年男性であった。

「なんだ、びっくりさせるなよ・・・。

しかも、風呂場にバンダナ巻いて入るなよ・・・」

中年男性は赤いバンダナを外す。

「Mっ禿隠しに良いやろ？」

さっき外で兄ちゃんと同じ年ぐらいの兄ちゃんにもろたんやで。

これ着けて風呂に入れ言うて」

「・・・マジかよ？」

で、そいつはどうした？」

「追いかけてこがしたいから外出る言う取ったわ」

「姫っ！！」

「今行きますわっ！！！」

と姫は裸のまま、あの低い敷居を乗り越えてくる。

「うひゃーーーーっ！！！」

と叫び声を上げたのは創真と中年男性だ。

「おまっ・・・！」

おまっ・・・！」

おまえっ、いくら何でも凄すぎるぞっ！！」

「何も無いではないです事・・・？」

人騒がせですわね・・・」

「むしろ、人騒がせはお前だ・・・！」

そんな事より、竜斗が外に出たらしい！

俺は走って車を取って来るから、お前は急いで着替えてチェックアウトしてくれ！！」

「了解ですわ」

創真は急いで服を着ると駐車場まで走り、ディアブロに乗って旅館の前まで向かった。

その頃にはすっかり日が沈んでいた。

ディアブロの車幅だと狭い温泉街はかなりきつかったが、やはり創真は運転感覚に優れているようだ。

旅館の前では既に姫が待機していて、WorkPadを取り出し座標を見ていた。

「裏六甲公園・・・裏六甲ドライブウェイの入り口の所で止まっているようですわ」

「裏六甲・・・あいつのホームコースだ」

竜斗はシンボルマークであるバンダナを中年男性に渡し、追いかけてこがしたいと言い残した。

「誘っているな・・・」

「ええ、罠の可能性が高くて、行くしか無いですわ」

阪神高速7号から六甲有料道路に入るとすぐに裏六甲公園にたどり着いた。

裏六甲ドライブウェイの入り口の所にZ2に跨がった竜斗の姿が見える。

竜斗はディアブロの姿を確認すると、Z2のタンクに付けられた小型発信器を放り投げ、けたたましく回転数を上げて一気に発進する。

「やっぱり発信器が付いているのを知っていたようですわね。

ついて来られるならばどうぞって事らしいですわ」

「そういう事ならばやってやる！」

創真もアクセル全開でその機影を負う。

ディアブロのV12エンジンが背後から唸りを上げる。

始めはひとつ先を行くZ2であったが、次第にコーナーの二つ先を行くようになり、徐々にその差を開けられて行く。

「まじかよ・・・」

「創真さんは進入、旋回、立ち上がり・・・、全ての動作にまだまだ余裕がありますが、あの方は一切の余裕をそぎ落としていますわね。

特に創真さんは無意識の内に対向車を気にしているので、見通しの悪い右コーナーではラインがベストとは言えませんがね。

はっきり言って右コーナーがヘタクソですわ」

「随分とハッキリ言ってくれるな・・・」

「能力自体それ程差は有りませんが、乗り物と道に対する熟練度に大きな差があるようですわ」

「あいつ、走り込んでいたからな・・・」

「六甲山は複数の道が交わっている為、このまま山を登り切られれば間違いなく見失いますわね・・・」

ふと、後ろからヘッドライトの明かりが近づくのを感じる。

姫が後ろを見る。

「後ろから下品な車が近づいて来ますわよ」

「・・・Mitsubishi Lancer Evolution VIだ」

黒色のLancer Evolution VI・・・通称ランエボVIには黒服の男が二人乗り込んでいるようだった。

「どうやら竜斗さんのお仲間のようなですわ。

単に悔しい思いをさせるだけではなく、迎撃するつもりらしいですわね」

「犯罪者がランエボVIに乗るって何かおかしいだろ。

しかも、何故か千葉ナンバーだし・・・」

創真はかなりのスピードで走って来たはずだが、ここまで追いつかれている時点で、このランエボVIもかなり速い。

「立ち上がりが随分と速い車のようですわね。

こういう荒れている路面の場合は、いくら高い次元の加速・減速・旋回能力を有する車であろうとも、タイヤに十分な過重をかける事が出来ないのでシビアな運転を強いられますが、あの車は四輪駆動らしく無駄なくパワーを使い切る事が出来るようで

すわ」

「それは運転している本人が一番解っている」

「それに創真さんと同じく右コーナーが甘いのですが、あちらの方がボディが小さい分ライン取りに自由度がありますし、大分不利ですわね」

創真は少しでも前方に行くZ2に追いつこうと、山頂付近のストレートで思いっきりアクセルを踏み込む。

その瞬間、後方を走る黒のランエボVIが視界から消えた。

「このまま竜斗さんを追いかけて続けたとしても、アジトまで案内してくれるとは限りませんし、後ろの方々を締め上げた方が確実じゃなくて？」

「どうするんだ？」

「こうするんですの・・・！」

ストレートの終わり付近で姫は創真からハンドルを奪うとその場でスピターンする。

「何があってもハンドルはまっすぐ、アクセル全開でよろしくて？」

「なんなんだよっ・・・?!」

創真はわけも解らず言われるままに、まっすぐ進路を固定したままアクセルを全開にする。

もの凄いスピードで対向車線を走るランエボVIが迫ってくる。

このままでは衝突する。

「おいっ！！」

「そのままアクセル全開です事よ！！」

姫はスカートの中から小型のバズーカを取り出すと、助手席側のガルウィングを開け放ち、ランエボVIの僅かに手前の地面に打ち込む。

胸を圧迫するような爆音。

一瞬爆炎で視界が真っ赤に染まる。

弾けるアスファルトの舗装。

ランエボVIのボディが前後に回転しながら宙を舞う。

創真の駆るディアブロがランエボVIの真下をくぐり抜ける。

その様子はまるでスローモーションのように感じられた。

次の瞬間、大きな音と共にランエボVIのボディは逆さまとなり地面に叩き付けられた。

創真は思いっきりブレーキを踏むと、ブレーキディスクが火花を散し、僅かに横滑りしながらディアブロが停止する。

姫は開け放たれたままのガルウィングから飛び出すと、そのゴスロリ姿からは想像も出来ないスピードで横転したランエボVIへと迫り、車内から二人の黒服の男を引っ張りだすと、有無を言わず気絶させてスカートから取り出した縄で縛り上げる。

「相変わらず滅茶苦茶な奴だ・・・」

創真もディアブロから降りて姫の元に駆け寄る。

「それに、気絶させたら情報を聞き出せないだろ」

「どのみち、この手の方々は意識があったとしても喋るとは思えませんわ」

「じゃあ、どうすんだよ？」

「無意識から情報を引き出すまでですわ」

姫は耳元で経文のような低い言葉を呟く。

すると、意識を失った男が瞼をピクピクとさせて反応を示す。

「あなた達のアジトを教えて下さいな」

「ろ、六甲・・・あ、アイランド・・・。

・・・あ、アミューズ・・・メント・パーク・跡地・・・」

「ありがとうございますわ」

「すげえな、どうなっているんだそれ？」

「人間の聴覚は意識の有無に限らず常に働き続けているので、睡眠が浅い状態ですと無意識下で音に対して処理をしてしまうものですわ」

確かに創真は良く授業中寝ているが、授業内容が自動的に頭の中に入って来ている。

「特にお経のような音は人間の深層心理に作用しやすく、それを催眠術に利用する事で容易に相手の精神をコントロールする事が出来るんですの」

「宗教と催眠術の併用・・・。

それはブラフマンが能力者達にした事に似てないか・・・？」

「そう、レベルに差があれど、原理は同じですわね」

「なんで、そんな事出来るんだよ？」

「お父様から教わったんですわ。

父は脳科学者であり、宗教的な概念から人間の精神を研究していましたの。

まあ、最近ではブラフマン等と名乗っているみたいですけど」

「どうりで色々詳しいわけだ・・・」

「いくら親子とはいえ、わたくしはわたくし、お父様はお父様。

今は袂を分けた別々の人間ですわ」

そういう姫の顔は寂しそうであった。

「姫・・・」

「これも、わたくし達の現実ですわ。

このレールの先にどんな現実が待っていようとも、わたくし達の乗った列車は途中下車出来ませんわ。

ならば、全てを受け入れ、全ての障害物をぶち壊すまででなくて？」

「姫は・・・やっぱり強いな・・・」

「あなたにも強くなって戴けなければ、この先生き残れませんわよ」

「強くなれるんだったらなりたいが・・・」

だが、それが出来るか出来ないかは別の問題だ・・・。

裏六甲ドライブウェイから、西六甲ドライブウェイを經由し、表六甲ドライブウェイを下りひたすら直進する。

海に突き当たったら右折し、六甲ライナーの高架の下を通過して海を渡り、六甲アイランドシティへと向かう。

六甲アイランドシティは人工の島で、島の中央に事務所や商業施設、住宅街があり、特にファッション関係の施設が多い事で知られる。

また、島の周囲には工場が多いが、島の中央とは公園や歩道等の緑地で隔たれ、工場地帯からの排気に対策している。

そこにあるアミューズメントパーク跡地は、世界最大最多数のウォータースライダーが有名で人気を博していたが、大震災の際に壊滅的被害を受け、莫大な修繕費用を捻出する事が出来ない為、廃墟となり長い間放置されている。

創真達がフェンスを開け放つと、作業灯に照らされた敷地内で、10人の黒服の男が武器を手に待ち構えていた。

おそらく、竜斗から連絡を受けて警戒していたのだろう。

「さて、片付けますわよ」

敵の集団に特攻して行く姫。

「って、能力使わなきゃ幾ら何でも無理だろ！！」

せめて、武器を貸してくれよ！！」

姫は髪やドレスを振り乱し、武器を持った7人の黒服を同時に相手にする。

溢れた3人の黒服が創真に迫り来る。

手にはそれぞれ棍棒、釘バッド、チェーンと武器を手にしている。

「ソーマ様だったらこの程度の相手ならば、武器や能力に頼るまでも無く軽くあしらえますわ。

同一人物であるソーマ様に出来て、あなたに出来ない訳ありません事よ。

強くなりたいのならば行動あるのみですわ」

「そんな事言っても無理だ！

相手は武器を持っているんだぞ！！」

創真は3人に囲まれないように、牽制しながら後ずさりするのでやっとだった。

姫は延髄に放った回し蹴りと、みぞおちに放った掌底で既に二人を倒していた。

更に背後に回った敵を肘打ちで沈める。

幾ら何でも強すぎだ。

「助けてくれよっ！！」

「これしきの事で助けるつもりはありませんが、実戦的かつ具体的なアドバイスはさせて頂きますわ」

「何でも良いから教えてくれ！」

創真は姫の言葉に耳を傾ける。

「まずは深呼吸をして下さいな」

「何処が実戦的で具体的だよっ！？」

「あら、十分有効な手段ですわ。

心が落ち着きさえすれば、あなたを中心に流れ行く事象を感じられるんでなくて？」

「そうか、運転する時のあの感覚を使えって言うのか！」

創真は建物の壁を背に深呼吸をして視野を広める。

車の運転を通しコツを掴んでいるので、精神を統一しさえすればその状態に持って行く事は簡単だった。

スローモーションのように自分へと迫り来る棍棒や、釘バット、チェーンの動きが解り、次々と身を交わす。

「では、その流れの先に石を投げればどうなります事？」

石・・・つまりは拳って事か？

相手の動きが手に取るように解るので、その軌道の先に拳を突き出して見た。

すると・・・！

拳に重い衝撃を感じると共に、迫りつつあった棍棒を持った男がすっ飛んで行った。

カウンターと言う奴だ。

まだチェーンの男と、釘バットの男が残っている。

二人の黒服は創真を挟みかけるように襲いかかる。

釘バットは上から、チェーンは横から迫る。

釘バットは下半身がお留守だ。

足払いで釘バットをアスファルトの地面へと沈め、バックステップで距離を保つ。

すると空ぶったチェーンの顔面に隙が出来る。

そこに全体中を乗せた拳を叩き込むと、回転しながら倒れ込んだ。

「無理と言わずやれば出来るんでなくて？」

その時には姫は他の全ての敵を一掃し拘束していた。

「お前が言うと言得力抜群だな・・・」

「さて、あとは末端として動いている少年少女を捕らえるだけですわ」

恐らく竜斗もそこにいる事だろう・・・。

もはや確実に黒だ。

どんな顔をして、どんな事を話せば良いか解らない。

出来れば対面したくないとは思うが、それは姫に言われるまでもなく逃避でしかないだろう・・・。

「たぶん、あそこでしょうね」

敷地内には巨大プールの他、屋内型のアミューズメント施設があった。

「覚悟はよろしくて？」

覚悟・・・？

そんなものは無いさ。

何時もそんなものをする暇もなく、ただ流されて行くだけだ。

廃墟と化した施設跡内には、事務書机が多数設置され、その上に置かれたパソコンのディスプレイが闇の中で光っていた。

吊るされた作業灯の下で待ち構えていたのは3組、6人の少年少女達だ。

ガングロ・ラッパー風の最近の男女。

ヤンキー・スケバン風の古風な男女。

ネクラな雰囲気の、オタク風の男女。

置かれた机の数に対して、ここに居るのは6人の少年少女だけ。

おそらく、他の構成員は連絡をうけた時点で念を入れて逃げたのだろう。

残っているのは現場責任のある少年少女達の代表格かも知れない。

しかも、3組共に別の制服を着て、一見して関わり合いが無さそうな面々である。

だからこそ、この組織が幅広く大規模に活動していたんだろうと考えられる。

とりあえず、この場に竜斗がない事に創真は安堵した。

「さあ、お子様達。

大人達は拘束しましたわ。

あなた達も大人しく捕まった方が身の為です事よ」

「ふふふふっ！！

はーっはっはっはっ！！」

だが、突如として高笑いを上げる少年少女達。

「それマジで言ってるの？

マジであり得ないんですけどお！！」

「あり得ないのはあなたのお下品なお顔ですわ！！」

姫はガングロに睨みを効かす。

可視光線を出して相手を焼き殺さん勢いだ。

創真はぞっとする。

「まさか、俺たちが、あんな雑魚の、親父どもの、手下な訳、あるかよっお、チエキラァ！？」

ラッパーが韻を踏んだリズムで喋る。

「アタイラ舐めんじゃねえよ！！」

「奥歯に手え突っ込んでガタガタ言わしたるぞコラァ！！」

スケバンとヤンキーは何故か声が甲高い。

「まるで逆よ・・・」

「僕達が大人達を使っているんだ・・・」

オタク少女と少年がボソッと言う。

「・・・こいつら、非常にむかつくな。

・・・ぶっ飛ばしちゃって良いか？」

「大人達を倒したからと言って、僕たちを倒せると思わないで欲しい・・・」

三人の少年が手を合わせると、その合わさった所に一瞬白い物が見えた。

そして、次の瞬間、創真の左腕は血を噴き出しながら宙を舞っていた。

「ぐっ、またコレかよっ・・・！！

ワンパターンにも程があるぜ・・・！！

って事はコイツら能力者か・・・？！」

「ええ、でも運命に大きな影響力をもたらさない小能力者・・・小アルカナのようですわ。

指定された時と場所以外に戦っても問題有りませんから、今片付けてしましましょう」

姫が創真にキスをすると、ソーマの世界が広がり人格が入れ替わる。

額の傷が光を放ち何事も無かったかのように左腕が再生した。

「?!」

驚きを隠せない小アルカナの面々。

「ようやく、僕の出番が回って来たようだね。

今回は出番が無いんじゃないかとハラハラしてたよ」

「だって、創真さんにも強くなって頂かなければ、この先やって行けません事よ」

「ありがとう、姫。

君のおかげで大分強くなる事が出来たようだ。

それに君との新鮮な裸の触れ合いも楽しかったよ」

ソーマは不敵に笑う。

「嫌ですわ、ソーマ様ったらエッチなんですからっ！」

「ふ、ふ、ふざけんじゃねえぞコラァ！！」

「声が裏返ってるけど、どうしたんだい？」

ソーマはヤンキーに微笑み返す。

「お前も、能力者なのか、チェキラッ！？」

「そう、No.XVIII 月のソーマさ！」

「大アルカナ・・・。

しかも、神に最も近い男・・・。

でも、僕達が力を合わせれば怖くない・・・」

再び、少年達三人が手を合わせる。

白い物体が産まれたかと思うと、次の瞬間ソーマの胸を貫いていた。

「威力は凄まじいね」

「この化け物野郎っ！！

死にさせコラァ！！」

少年達は謎の攻撃を連発する。

ソーマは時には交わすものの、基本的にその場に止まり様子を見る。

どうやら、一回につき一発ずつしか出せないようだ。

「お前の能力にも、限界があるはずだ、チェキラ！！」

「それはあなた達の能力にも言えますわね」

再び手を合わせ、白い物が産まれたその瞬間、姫が三人の少年をまとめて蹴り飛ばしていた。

そこには白くて長細い魚のような物体が浮いていた。

・・・いや、正確に言うと、ただ浮いているのでは無く、もの凄く遅い速度で前進していた。

「やりやがったなコラァ！！！」

ヤンキー少年が白い魚に触ると、動きが加速してソーマに襲いかかったが、目には見える状態だったので、軌道が読めて難なく交せる。

「ヤンキー君は加速能力を持つみたいだね」

「こうなったら、ゲリラ戦だ、チェキラッ！！」

「マジで許せないんだけど、この女！！」

ラッパーがガングロに触れた瞬間、彼女のケバケバしい姿が見えなくなり、姫のツインテールが空中へと引っ張られた。

「わたくしの大切な髪によくもっ！！！！」

姫が怒りに震えて回し蹴りを放つと、目に見えない何かがラッパーを巻き込みながらすっ飛ばす。

次の瞬間には醜く顔をしかませるガングロの姿が露になった。

透明化していて急所をそれた為、ダメージを食らっているものの、まだ気を失っていないようだ。

「ラッパー君は透明化能力みたいだね。

でも、そんなに有効時間が長く無いようだ」

「舐めんじゃねえ！！」

ヤンキーがスケバンに触れると、彼女は加速しソーマへと迫る。

だが、ソーマが身を捻って攻撃を交すと、スケバンは遠くまで走り抜けてしまった。

そして、壁にぶつかる寸前で止まる。

「どんなに加速したとしても、人間の感覚や神経がそれに付いて行けるわけでもないね。

しかも、これも有効期限が短い」

次の瞬間、オタク少年がソーマの目の前にいた。

どうやら、スケバンに気を取られている間に、ラッパーの透明化能力で近づいていたようだ。

「行け、フライング・ロッド・・・」

ソーマの腹に白い魚のような物体が刺さり、体がミイラのように乾涸びて行く。

「君の能力は水分を食らう生物の生成か。

普通はこんな遅い攻撃食らうわけないけど、遅い分だけマトモに食らうと厄介だね」

次から次へと体が乾涸びて行く為、ソーマの再生が追いつかない。

「油断大敵だ・・・」

「これは油断じゃなくて、余裕って言うんだぜ」

そんな状況でも創真は不敵な笑みを絶やさない。

「知っているだろ？」

戦闘中にパートナーがやられても失格となり、能力を失うんだ」

姫は阿吽の呼吸でソーマの意思を読み取り、オタク少女の鳩尾に膝蹴りを放って

いた。

オタク少女は胃の内容物をぶちまけながら倒れる。

そして、オタク少年の胸からカードが飛び出した。

「知っているよ・・・。

でも、それは君も同じ・・・。

僕らはひと時だけでも足止め出来れば良いんだ・・・」

オタク少年の能力が消失し、再生を始めたソーマは彼を拳で沈める。

その時、透明化したヤンキーと、ガングロ、ラッパーが一斉に姫に襲いかかろうとしていた。

「姫っ！！！」

ソーマは姫の元に向かおうとするが、後ろから迫りつつあったスケバンに羽交い締めをされる。

「アタイラを舐めんじゃねえって言っただろ！！」

「君たち止めるんだ！！！」

「勝負に汚いも、クソもねえ、チェキラッ！！」

そして、次の瞬間・・・。

ガングロは顔面に飛び膝蹴りを食らって、歯がボロボロに折れてすっ飛んだ。

続けて背後にいたラッパーの鳩尾に肘打ちをし、そのまま流れで裏拳で鼻を叩き折り、最後に拳を打ち下ろし金的攻撃を食らわせる。

泡を吹いて倒れ込んだラッパーの胸からカードが飛び出す。

「このアマア、強すぎるじゃねえかよコラァ！！」

透明化していた為、攻撃を食らわずに済んだヤンキーは、姫の危険性を察して距離を保った。

「だから言ったのにねえ・・・。

君もそんなに強く抱き締めないでくれるかい？

背中が気持ちよくてたまらないよ」

「な、舐めるんじゃねえ！」

ソーマは関節を外すし羽交い締めから抜け出すと、目に止まらないスピードでスケバンの唇をペロンと舐めた。

「・・・」

「そんなに言うから舐めてあげたよ。

君の唇は・・・甘いね」

ソーマはスケバンに不敵な笑みを返す。

「な、舐めるんじゃ・・・ねえよ・・・」

赤面しながらへろへろと腰砕けになるスケバン。

「てめえ、俺の女に何するんだコラあ！！」

ソーマへと殴り掛かるヤンキー。

だが、突如として胸からカードが飛び出し、力を失って倒れ込んだ。

「知っているかい？」

パートナーとの信頼関係を失っても失格となるんだ」

「棒の1、棒の8、剣の9か・・・。

小粒は趣味じゃないけど、一度に食べると悪くないものだね」

ソーマがカードを確認すると、掌の中に吸い込まれるように消えて行った。

「じゃあ、あとは任せたよ姫！」

そう言うとソーマは意識を深く沈めた。

創真は急に意識が表層に出て、戦いの余韻に浸り立ち尽くしていた。

「・・・ああ言う戦いもあるものなんだな」

「もう、創真さんったらエッチすぎますわ！」

「いや、エッチなのは俺じゃなく・・・、いや、俺か？」

個人的には平和的な解決方法なのではないかと思ってしまう創真であった。

「カードは能力の源である暗示の象徴・・・それを失ったこの方々は最早無力ですわね」

姫は力を失ってへたり込む6人の少年少女をまとめて柱に縛り付けた。

「さて、あなた達の悪行について洗いざらい喋って戴きますわ！」

姫はスカートの中から鞭を取り出し、地面を叩き鳴らす。

「って、拷問かよっ！！

また、催眠術で引き出せば良いだろ？」

「あら嫌ですわ、創真さん。

だって、こちらの方が気持ち良くなくて？」

ニッコリと笑う姫。

「なんだ、その今までに無い程の屈託の無い笑顔は？」

どちらかと言うと、お前の方が悪そうだ・・・」

「あたり前です事よ。

罪深き十字架を背負い美と言う孤高の道を行くわたくしと、何の美学も無い小悪党を一緒にされては困りますわ」

と再び鞭を振るう姫・・・。

「凄すぎるな、お前・・・」

「そや、手荒な事はせんといてやー」

「！！」

突然背後から聞こえた声に創真と姫は振り向いた。

そこにはツンツン頭で学生服を着た少年・・・竜斗が立っていた。

額にはバンダナが無く創真と同じような傷跡が露になっていた。

「お前が大アルカナとは思わへんかったでー」

「・・・まさか、お前もか？」

「そや、No.XI 力の竜斗や。

改めてよろしゅうなー！！」

「・・・通常、神の座を狙う敵同士であるアルカナが、組織的に動く事はあり得ませんわ。

もし、組織を組むとすれば、強大な力によって統率されていると思っていました。

大方彼らは貴方の元敵であり、倒した後にカードを奪う事無く組織に取り込んだ・・・そう言う事ですわね？」

「そや、俺が主犯っちゅうやっちゃ」

「竜斗・・・、マジかよ・・・?!」

「ホンマやで」

「それだけ解れば十分ですわ！！」

姫は目に止まらぬスピードで間合いを詰め、竜斗へハイキックを浴びせる。

竜斗は辛うじてその攻撃を腕で防ぐ。

「な、なんやこの速い嬢ちゃんは!？」

「見た所、パートナーを連れていませんわね！！」

いくら大アルカナとは言え、パートナーが居なければただの人間ですわ！！

大アルカナ同士の戦いは運命大きくに関わる為、定められた時と場所でしか行えませんが、今ここでわたくしがブチのめす分には問題ありません事よ！！

どんな事情があろうが罪は罪ですわ！！

その体で償って戴きますわ！！」

今までにない程のスピードで蹴りや突きを放つ姫。

それを全て攻撃の応酬で返す竜斗。

突きには突き、蹴りには蹴りで相殺する。

「とんでもない子やで、ホンマ・・・！！」

でも、解ったで！

そのパワーとスピードの秘密、それはスカートの中やな！

古武術には膝を中心にした独自の体裁きによって重心をコントロールする事で力を増し、袴によって動きを読まれにくくする事で高速で動くように見せる技法があるそうや！

そのスカートは袴の代用っっちゃう所やろ？！」

「ご名答ですわ！！

でも、それが解った所でどうなる事でもありません事よ！！」

「それもそうやな・・・」

竜斗は笑みを浮かべ体の力を抜くが、目は強い意思に輝いていた。

「俺にはどんな動きが読みにくかろうが、スピードが速かろうが関係あらへん」

創真はハッとなった。

きっと、竜斗には姫の動きがスローモーションのように見えているんだと。

そして、竜斗は姫が動きの先に拳を置く。

「姫え————っ！！」

創真が叫んだ時には既に遅く、竜斗の拳が姫の鳩尾に食い込んでいた。

姫は自分の突進力をそのまま返されて、反対側にすっ飛んでいた。

姫に駆け寄る創真。

竜斗は動揺する創真を尻目に縄で縛られた仲間達を解放する。

「そういや、今日は学校に來いへんかったなあ。

空ちゃん泣いてたで・・・。

今まであんな空ちゃん見た事あらへんよ・・・。

空ちゃん泣かせて、こないな所におんのが、お前にとって大切な事なんか・・・？

」

竜斗は部下を連れて立ち去り様に、創真を一発殴りつけた。

「これは空ちゃんの代わりや」

殴られた頬の痛みよりも心が痛かった。

「続きは決戦の場でしよや。

その時は友達だからって容赦せえへんで。

これも、俺達の現実や」

結局、折角捕縛した黒服の男達にも逃れられ、主犯が解ったと言うだけで収穫は無かった。

おまけにそれが親友である竜斗であり、しかも何時かは戦わなければならない大アルカナでもあった。

そんな事、知りたくも無かった。

創真と姫は海岸通りの事務所まで帰って来ていた。

社長室の奥にはバス・シャワー・トイレを備えた仮眠室があり、姫はベッドで、創真はソファで横になり、ランプの吊るされた天井を眺めていた。

内装もベッドもソファも仮眠室とは思えぬ程質が高く、まるで高級な寝室そのままであった。

「大惨敗ですわね」

「てっきり、怒り爆発かと思ったが、それほど引きずって無いな・・・」

「あたり前ですわよ。

生きていればこんな事は幾らでも有りますもの。

それに、都合が悪いからと行って、太陽が登るのを待ってくれまして？

誰の元にも容赦なく毎日はやって来て、立ち止まろう物ならば置き去りにされてしまいますわ。

反省が無いのは違うと思いますが、明日も仕事がある事ですし、引きずるだけ時間の無駄ですわね」

「やっぱお前は凄いな・・・」

「あら、自分で選んだ仕事ですもの。

何処で何をしても辛い事はありますが、それが自分自身で選んだ道の先にあるものならば、納得する事が出来ますわ」

「そう言うもんかね・・・」

「そう言うものですわよ。

人はみな自分らしく生きられる道を探し、その先にある現実と向きあって生きているんだと思いますわ」

「自分自身の道か・・・」

「そして、それがどんなに困難な道であっても、共に歩む人がいれば乗り越えて行けますわ」

「・・・そうか」

「さて、わたしはくしはお家に帰って休みますけど、創真さんはどういたします？」

「・・・この部屋を使わせてくれるんだったら、今日はここで休むよ。

ちょっと一人で考えたいんだ・・・」

「そうですか、では明日も仕事を宜しく頼みますわね」

「働かざる者食うべからずって奴か・・・」

創真は笑う。

「よく解っていらっしゃいますわね。

例え何処で何をしてようとも、日々の生活から逃げ出す事は許しませんわよ。

色々と経験を積みばその中から創真さんの歩むべき道が見つかるかも知れませんが
すし」

「経験し過ぎだけだな・・・」

姫は創真に微笑み返した。

「では、お休みですわ」

姫は創真の頬にキスをすると立ち去って行った。

創真はそのまま天井を仰いだまま目を瞑る。

・・・。

・・・。

・・・。

創真の脳裏に空と竜斗の三人で学校で過ごした日々が浮かんで消える。

今となっては思い出は辛いだけなので、必死に掻き消そうとするが、一向に止まる
気配がない。

しかも、良い事も悪い事も全てが美化され尊く思えてしまう。

それは、昨日までの事なのに、まるで遠い日々のようだ。

永遠などあり得るはずもないが、永遠に続くものだとは無条件に思い込んでいたな。

ひょっとしたら、俺が空の元を立ち去りさえしなければ、そんな日々が永遠に続いて
いたのだろうか？

それはあり得ないな。

何時かはみんな学校を卒業し、それぞれの道を歩み始め、バラバラになってしまう
。

それに知らなかっただけで、俺が大アルカナとして戦い続けて来たと言う事も、竜
斗が大アルカナであり罪を犯し続けたと言う事も現実なんだ。

どんな形かは知らないが、それが明らかになった時、現実と向き合わなければなら
ない。

姫の言う通り何処で何をしてようが、結局は辛い事からは逃れる事は出来ないんだ
。

大切なのはそれを納得して受け入れられるような自分の道を、共に歩んでくれる人
と行く事か・・・。

俺の道・・・。

俺と歩む人か・・・。

・・・。

・・・。

・・・。

体が疲れていると言うのに一行に眠くなる気配が無かった。

考えたくも無いのに思考は止まる事を知らず、意識はますます冴え渡る。

早く朝になってくれれば、姫の仕事を手伝いの中で、気を紛らわせる事も出来るのだが・・・。

ふと、目を開けて壁掛け時計を見ると、残念ながら目を瞑ってから殆ど時間が経っていないようだ。

時計を眺めていると秒針が進む速度が異様に遅く、一分が経過するを待つのがかなりの苦痛だった。

こんな状態では朝を迎える頃には、創真の一生分に匹敵する程の長い時間を過ごさなければならない気がする。

駄目だ耐えられない。

創真は一人事務所を出てバイクを止めてあるメリケンパークの駐車場に向かった。

海岸通りから駐車場まではすぐ近くだが、自分の歩く速度がやけに遅く感じられ、腹立たしくあった。

メリケンパークの駐車場は先日あれだけの事があったはずなのに、何事も無かったかのように普通に営業していた。

創真は愛機である赤と黒のツートンカラーのGPZ900R-A2に股がりエンジンに火をつけると体中の血が燃え滾る。

暫くの暖気の後、創真はアクセルをあおり気味にクラッチを繋ぎ、矢のように発進する。

何処に行くかは考えていなかった。

ただ、無心になって走りたかった。

創真がバイクが好きで理由、それはゆっくりと流れる退屈な時の流れの中で、本来あるべき速度で動く事が出来る気がするからだ。

それにアクセルを捻り力強く加速すると、まるで自分自身の重さから解放された気になれる。

創真は六甲山の西の溪谷沿いに行く有馬街道を北上し、西六甲ドライブウェイを右折し東に駆ける。

暫くは長いストレートや中高速コーナーが続くが、山が深くなると低中速が多くなる。

そこからが創真の好きなエリアであった。

アクセルを戻したり、ブレーキング等のちょっとしたきっかけでコーナーのインに向かって大きくハンドルが切れ込み、アクセルを捻ると力強く立ち上がって行く。

全てでは無いがKawasakiのネイキッドは挙動の変化が大きく、その分だけ限界が低く高速コーナーは弱い、スラロームを繰り返す低中速コーナーの連続する峠では、まるでレールに沿っているかのように気持ち良く走る事が出来る。

そんな時、創真は自分自身が路面を読み取ってバイクを動かす、機械の一部になったかのように、無心になる事ができた。

創真は裏六甲とサンライズドライブウェイの交差点で右折し、ケーブルカーの六甲山上駅の近くにある展望台に向かった。

六甲山展望台は神戸の夜景を一望出来る事で名所であり、日本三大夜景の名に恥じない美しさであった。

創真はバイクを止め、暖かいブラックの缶コーヒーを飲みながら黄昏れる。

バイクに乗って走っている間は良くても、降りればまた止めどない思考の波が押し寄せる。

結局その場凌ぎでしか無かったな・・・。

創真は夜景を眺めながら無意識にP501iを手にしていた。

新規メールを開き、宛先を空に設定したものの、書く事など何も無い。

自分自身が何をしたいのか良くわからないな。

創真は苦笑した。

そのまま中央のスティックを長押しして携帯をロックする。

だが、ポケットに仕舞おうとしたその時、あのインドの宗教音楽のようなメロディが鳴り響き、創真は背筋が寒くなった。

創真は届いたメールに目を通し息を飲む。

来たか・・・。

戦いはすぐ一時間後。

舞台は創真達の通う高校。

そして、対戦相手は竜斗だった。

・・・。

・・・。

・・・。

このまま、戦いに行かなければどうなるのだろうか？

頭に埋め込まれた爆弾によって俺は死に、竜斗は不戦勝って所か・・・。

それも悪く無いかな・・・。

そして、創真は手すりにもたれかかったまま、浅い微睡みに落ちて行った。

「それでも僕は戦い続けられないのさ。

これも僕達の現実なんだから」

微睡んだ創真に代わってソーマが体を動かす。

ソーマは手にした携帯を見ると苦笑しながら何か操作をし、ヘルメットを被るバイクに跨がってエンジンを起動した。

「さて、行くとするか！！」

そして、ロックしたフロントタイヤを中心に、リアタイヤを滑らせ、路面にタイヤで円を描くと走り出した。

深夜の学校の屋上。

月が浮かぶロンドン塔の下で二組の能力者が向かい合っていた。

一組は不敵な笑みを浮かべた少年・・・ソーマと、ゴスロリ姿の少女・・・姫。

そして、もう一組はツンツン頭の少年・・・竜斗と、車椅子に乗った意識の無い少女だ・・・夕鶴だ。

「コイツが俺の幼なじみでパートナーの夕鶴や。

よろしゅうな」

竜斗は夕鶴の頭を撫でると、代わりに頭を下げた。

意識が無くても夕鶴は竜斗と強い絆で結ばれているのだろう。

故にパートナーと成り得ているのかも知れない。

「ホンマは喧しい天の邪鬼な奴なんやけどな、震災で負った怪我が元で今は大人しゅうなってもうた。

世間から震災の事は忘れられつつあるけど、未だに心や身体の癒えないもんも沢山おる。

補助が打ち切られても、震災孤児は沢山おって金を必要としている。

これが俺の現実や。

だから俺はそいつらの為に金を稼がなきゃあかん。

例え罪を背負おうとも。

だから俺はそいつらの為に戦わなきゃあかん。

例え友達と戦う事になろうとも。

どうしようもない現実かも知れんけど、俺が神になりそんな現実を変えてやるんや

」

「それはこちらも同じだよ・・・！！

僕こそが神になり、全てを変える男だ！！」

月夜の下、二組の能力者が互いのパートナーと唇を重ねる。

闇夜に二人の少年の額の傷が光る。

「ほなら行くでー！！」

互いに高速で踏み込み、拳を合わせる両者。

竜斗の拳はソーマの拳を砕く。

ソーマは砕けた拳を再生させながら、反対側の拳で竜斗の頬を殴りつける。

その肌は鋼鉄のように固く、ソーマの拳は一瞬にして血まみれになった。

「ピンピンに固いね君！！」

「そう、それが俺の能力や！！」

何度かの高速の拳応酬の後、ソーマは目で姫に合図を送る。

姫はスカートの中からモーニングスターを取り出すと、ソーマに向かって投げる。

ソーマは宙を舞うモーニングスターを掴み、思いっきり竜斗の頭に叩き付けるが、鉄球が反動で弾けとんだだけであった。

「こりゃ、凄いね！！」

「どうも！！」

大きな隙を見せたソーマのみぞおちに、思いっきり拳を叩き付ける竜斗。

体がへしゃげて口から内蔵が飛び出すが一瞬的再生する。

ソーマは間髪入れずに竜斗の金的に思いっきり蹴りを放つが、カーンと言う音と共に足が跳ね返る。

「俺の玉は18金やで！」

「うまい事言うね！」

竜斗は拳を握り合わせてソーマの脳天に叩き付けようとするが、ソーマはそれを腕で庇う。

両腕がバキバキと砕けてあらぬ方向へ曲がるが、なんとかその勢いを殺す事に成功する。

そして、再生をしながら距離を保ち、体勢を整える。

「互いにこれじゃ、どちらかの気力・体力が尽きるまで戦うしか無いね！！」

ソーマは不敵に笑う。

「それでも、ないんちゃうかな？」

月の暗示は現実逃避やったはずやで。

その変貌した人格も、ブラフマンによって深層心理に刻まれた暗示が具現化してるんとちゃうかな。

おそらく再生と言うより、指定した範囲で現実を無かった事にする能力なんとちゃう？

まあ、結果的に再生する事には変わり無いんやけど、例えば脳に損傷を負って範囲指定する事が出来なくなったらどうやる？

他の部分は庇わへんかったのに、顔面や脳天の攻撃だけを防ぐってそう言う事ちゃうの。

脳天から棒や玉に至るまで硬質化出来る俺の能力と比べれば、どっちに分があるかは明白なんとちゃうかな」

「さすがに鋭いね・・・！」

ソーマの額に汗が垂れる。

「まあ、あの生徒会長に比べればやけどね。

ほんの少しは後遺症出るかも知れへんけど勘弁したってや。

俺は負けるわけには行かんのや。

特に自分自身の気持ちに嘘をつき、現実から逃げ出している奴には決して負けへんよ！」

そして、また互いに攻撃の応酬を繰り広げる。

その戦いを創真は意識の浅い所で見つめていた。

やっぱ、こいつはすげえ奴だな。

現実を見据えるだけじゃなく、現実を変える為に戦っている。

例え手を汚そうが、自分にとっての正義を貫く強さを持っている。

それこそまさしく姫の言う自分の道を行くって奴だ。

俺には戦う理由なんて何も無い。

ただ、現実から逃げ出して、流されて続けているだけだ。

まあ、仕方ない。

俺はその程度の人間だしな。

いつの間にかソーマは創真へと変わっていた。

「もう、終いにしよか・・・」

「お前にやられるんだったら悪く無いぜ・・・」

迫りくる竜斗の拳。

創真の脳裏に空の笑顔と、姫の微笑が浮かぶ。

こんな時に二人も女の顔を思い浮かべるなんて、俺はつくづくスケベなんだな。

創真は苦笑しながら身を委ねた。

・・・。

・・・。

・・・。

その時、時が止まった。

そこは太陽と月が交わる不思議な空間だった。

昼と夜が描かれた円盤を背景にした、現実味の無い舞台のような世界だ。

そして、そこで創真とソーマ、本来交わるはずのない二人が相対していた。

「やあ、こうして顔を合わせるのは初めてだね」

自分と同じ顔、背格好をしているものの、不敵な浮かべ飄々としている為、雰囲気

が大きく違う。

「お前は俺か？」

「そう、僕は君さ。

意識であり無意識であり、夢であり現実であり、太陽であり月であり、強さであり弱さである。

同じコインの表と裏・・・。

それが僕らさ」

確かに心の根本を共有しているのを感じ、それが間違いなく自分であると認識出来る。

「僕たちは今までそれぞれの現実と戦って来た。

僕は敵と言う現実と。

君は日常と言う現実と。

それも全ては大切なものを守る為さ」

「大切なものか・・・」

「もう、気がついてるだろ？」

脳裏に空と姫の姿が浮かぶ。

「・・・とことん俺ってロクデナシだな」

創真は苦笑する。

「そう、僕らは姫の言う通りスケベなのさ。

都合が良いかもしれないが、空も姫も両方欠かす事が出来ない大切な存在なんだ。

でも、僕と君・・・。

空と姫・・・。

夢と現実・・・。

様々なものが交差し、本当の戦いが始まろうとしている」

「始まり・・・？」

終わりの間違いだろ・・・？」

俺は空を突き放してしまったんだ・・・。

それにここで竜斗にやられて致命傷を負うかもしれない・・・。

あいつは自分の意思を貫き通す凄い奴なんだ・・・。

あいつにやられるんだったら仕方ないだろ・・・？」

「いい加減に自分に嘘を付くのはやめたらどうだい？」

「お前に俺の何が解る・・・！？」

創真はソーマに殴り返す。

ソーマの痛みが自分の頬にも伝わって来る。

「言っただろ？」

僕は君だ。

僕に君の嘘は通用しないのさ」

創真は自分自身が殴り飛ばした頬を抑えながら自嘲する。

「ああ、俺は嘘付きさ・・・。」

脳裏に空の笑顔が浮かぶ。

「こんな時でも空に会いたいと思っている・・・。」

会って自分の言いたい事があるんだ・・・」

強く拳を握る。

「それに竜斗にだって、いや竜斗にだからこそ負けたく無い・・・！」

あいつは俺が認める凄い奴なんだ・・・。

いつも、俺を助けてくれていた・・・。

だから、そんなあいつを乗り越えて強くなりたいんだ・・・！！」

「そう、だから、僕は君と代わったのさ。

これは君が乗り越えるべき現実だ。

異能力が有ろうが無かろうが関係無い。

持てる全ての力を使って立ち向かうんだ！

絶対に諦めさえしなければチャンスは掴める！！」

「ありがとう、俺！！」

「がんばれよ、僕！！」

・・・。

・・・。

・・・。

竜斗の拳が創真の頭を潰そうとしたその瞬間、創真の両の目が強く輝く。

そして、竜斗の拳の側面に手を当てて、力の方向を流して攻撃を交わす。

竜斗は込めていた力が強いだけあり、大きくバランスを崩して倒れ込む。

さて、どうするか・・・？

一度、この場から逃げてでも体勢を整えるんだ。

例えカッコ悪く見えても絶対に勝つんだろ？

心の中にソーマの声が響く。

「ああ、絶対に勝つ！！」

創真のかけ声に竜斗は思わず身構えるが、次の瞬間見たのは創真の後ろ姿であった

。

「あら、凄まじい気合いを入れて、逃げてしまわれましたわ」

「いや、あれは戦術的撤回ってやっちゃ」

竜斗は決意に燃えた創真の瞳を思い出し、笑みを浮かべて身震いする。

「作戦を立てて戻ってくるんとちゃうかな。

あいつはこの程度で諦める奴とちゃうよ。」

「あら、創真さんの事を良く解ってらっしゃいますわね」

「そりゃそうや、心の友やもん。

そう言う嬢ちゃんこそ、心配してないようやね」

「わたくしはあの方を信じてますから。

あの方は神になれる器ですよ」

「なんや、気が合うなあ。

嬢ちゃんと俺は差し詰め、あいつを巡る恋のライバルっちゅう所やな」

「あらあら、お嘆美な冗談はよして下さいます事。

どうせ、それは適わぬ恋ですわね。

なにせ、あの方はわたくしだけのものですから。

空さんにもあなたにも負けるつもりは御座いませんわ」

姫は微笑を浮かべた。

俺はやってやる・・・！

絶対に負けてやるか・・・！

どうすれば良いかは解らないが、考えて、考えて、考え抜いてやるっ！！

創真が再起を誓い廊下を走り続けると、僅かに登り始めた朝日に照らされた自分の教室の中に小さな人影が見えた。

ボーイッシュなショートヘアー。

小柄な体を包むセーラー服。

くりっとした大きな目。

間違いない・・・。

「空・・・！」

「おにいちゃん・・・！」

「何でお前がここに・・・？！」

それにボロボロじゃないか・・・？！」

空の靴はすり切れ、膝も擦り剥けだらけになっていた。

「お兄ちゃんが戦いをメールで知らせてくれたんでしょ？」

創真は六甲山展望台でソーマがメールを送信していた事を思い出した。

「でも、電車も無い時間だし、一生懸命走って来たの！」

空が何度も転びながらも走り続ける姿を想像すると胸が痛くなる。

「なんで、お前がそこまでするんだよ・・・？」

「お兄ちゃんの馬鹿っ！」

「そんなの決まっているでしょ！！」

「えっ・・・？」

「お兄ちゃんと一緒にいたいからよ・・・！」

「俺とか・・・？」

「そりゃお兄ちゃんは情けない所は沢山あるよ。

どんな時も関係無いって顔しながら、実はもの凄く気にしていて、辛くなったら逃げちゃう、不器用で嘘つきの臆病者だし。

「スケベだし、エッチだし、浮気者だし・・・」

「・・・酷い言われようだな」

「でも、良い所もあるんだよ。

空、知ってるんだから・・・。

お兄ちゃんと、もう一人のお兄ちゃんが、どんだけ空を大切に思ってくれていたか・・・。

空の為にどんだけ色んなものと戦ってたか・・・。

どんだけ辛くても、苦しくても、挫けても、逃げ出しても、絶対に諦めないか・・・」

創真は心の奥深くから何か熱いものが込み上げて来た気がした。

それは創真自身の気持ちでもあり、ソーマの気持ちでもあった。

戦いに明け暮れたソーマの日々が報われたような、そんな気がしたのだ。

「空・・・」

「そんな情けないけど、強くて優しいお兄ちゃんが好き・・・！！

大好きなの！！

だから、どんな時でも一緒に居たい・・・！！

だから、どんな時でも力になりたいの・・・！！」

創真は何も言わず空を抱き締めた。

「おにい・・・ちゃん・・・」

空も創真の肩を抱く。

その肩は小刻みに揺れていた。

「ありがとう・・・。

ありがとう、空・・・！」

・・・。

・・・。

・・・。

どれだけの時間、そのまま過ごしただろうか。

ひとしきり抱き締めると、創真は空を引き離した。

創真の目は涙に濡れながらも強く輝いていた。

「俺、空に伝えたい事があったんだ・・・」

創真はポケットに入れられた包みの中から、ハートのアクセントが付いた指輪を取り出す。

「誕生日おめでとう・・・。

ごめんな、誕生日プレゼントひとつ渡せず、自分の気持ちに嘘ばかりついて・・・」

創真はその指輪を空の指に填める。

空の顔は真っ赤になり、涙に濡れていた。

「何時も夢に逃げ込む俺を陽の当たる世界へと連れ出してくれる空・・・。

俺をいつも暖かく照らしてくれてくれる空・・・。

俺はお前が・・・」

創真は空の肩を掴み意を決する。

「・・・そんなお前が大好きだ！！」

窓から朝日が差し込む中、教室の真ん中で二つの影が唇を重ねた。

・・・。

空は火照った頬に伝わる涙を拭う。

「能力・・・目覚めなかったね」

「仕方ないさ・・・」

創真は笑う。

「力になれなくてごめんね」

「いや、お前は能力以上の力をくれたよ・・・。

能力があろうが無かろうが、自分の持っている物を全て使い、戦って行くしか無いんだ。

何よりも大切なのは諦めない気持ち。

そして、現実に立ち向かって行く勇気だ・・・。

ありがとう空、俺に勇気をくれて・・・！」

「お兄ちゃん！！」

空はもう一度創真を強く抱き締めた。

そう、俺の持っている物・・・。

絶対に諦めない事、空にもらった勇気、姫に教わった戦い方。

竜斗の攻撃を交わした時の事を思い出す。

一步間違えばその身を碎かれるかも知れないが、持てる力を全て使えば不可能じゃない。

「空、俺と一緒に来てくれ・・・！」

俺達の戦いの場に・・・！」

学校の屋上。

暁の中で姫と竜斗と夕鶴が待っていた。

「なんや、空ちゃんも来たんかいな」

創真に連れられた空は竜斗の姿を見て驚愕する。

「そんな・・・、相手は竜斗さんなの？」

「ああ、これが俺の・・・、俺達の現実だ。

でも、お前と・・・、お前と姫が一緒ならば立ち向かえる。

姫と一緒に見ていてくれないか・・・？」

創真は空に優しく微笑む。

「うん」

そして、空は姫の横に並ぶ。

「住む世界が違ふと申し上げましたのに、ここに来ると言う事は覚悟はよろしくて？」

「うん・・・。

解ったんだ・・・。

もう一人のお兄ちゃんも、戦いも、あなたも含めて全てがお兄ちゃんだって・・・。

だったら、それは空の一部でもあるんだもん・・・」

「まったく、馬鹿な子です事・・・」

姫は苦笑する。

「あなたは気に入りませんが、あの方の力となってくれた事には礼を言いますわ。

でも、勘違いしなくてよ。

あの方にとって一番の力となるのは、過去も未来もわたくしなんですから」

「うん、よろしくね！」

姫に笑顔を向ける空。

「今はあの方を信じて見守るとしましょうか」

「うん！」

創真は竜斗を前にして深呼吸をする。

始めから集中して行くんだ。

「ほなら、行くで・・・！」

「ああ、これからが俺達の本当の戦いの始まりだ・・・！」

のっけから全力の左ストレートだ。

だが、すでに集中している創真には、直前の動きからそれが解っていたので、体の軸をずらして交わす。

続いて右での肘打ち。

それもバックステップで交わす。

創真は竜斗の攻撃を連続して交し続けるが、その目は爛々と輝き必殺の気配を捨てない。

竜斗はその目の輝きに一瞬飲み込まれて身震いする。

「それやっ、その目やっ！！」

ビンビンくるでー！！

俺の求めていたのはそんな目なんやっ！！」

「はあ、なんなんだ？！」

竜斗は創真に向かい激い左ストレートを繰り出しながら興奮を隠せない。

それを横に交わす創真。

「知っての通り俺は超天才やし、俺と同じ次元に立てる奴はそうそうおらんかったんや！！」

竜斗はジャブを連続で放ち、創真はそれをバックステップで交し続ける。

「自分で天才言うな！」

創真はさっと横に避けて足払いを放つが、当然それに引っかかる竜斗ではなく、創真の膝を折ろうと体重を乗せた足を突きおろす。

創真も当然その動きを読んでいて、突き出した足を退けると竜斗の足を両足で挟んで転倒させる。

竜斗は頭から思いっきり地面にめり込むが、アスファルトの舗装に大きな穴が空い

ただけで無傷だった。

「お前は超合金かよっ！！」

その硬さに飽きれる創真。

「やるやないかっ！！」

そう、お前ならばいつかきっと俺と肩を並べ、全力で競い合えると思っていたんや！！」

竜斗はバック転で起き上がり体勢を整えると創真に向かって突進する。

「スカイフィッシュ捕獲競争や、弁当争奪戦じゃなくて悪いな！」

創真は竜斗をギリギリまで引きつけて、闘牛のように交しその後頭部に肘打ちを食らわせるが、まるで鋼鉄に叩き付けたかの感触でまるで効いた気配が無い。

「痛っ！！」

「あ、弁当争奪戦じゃなくて、チキチキ弁当争奪戦やから、間違わんといてー！！」

竜斗は思いっきり体重を乗せた回し蹴りを放ち、それを創真はしゃがんで交わす。

「そんなのっ、どっちでも変わらないだろっ！！」

「大きな違いやっ！！」

創真はがら空きになった竜斗の股間に裏拳を食らわせるが、二つの硬い玉の反力で拳を痛めただけだった。

「まじで18金だな・・・！！」

「棒はもっと硬いでっ！！」

竜斗はそのままヒップアタックで創真を潰そうとするが、創真は竜斗の足を支柱に横に回転してそれを避ける。

お互い距離を放しはあはあと肩で息をする。

ひたすらカウンター攻撃で急所を狙い続けたが、竜斗はまるで堪える様子がない。

空間認知能力によって流れを読むのは僅かに創真の方が上のようなのだ。

だが、竜斗にはあの硬化能力があるので、互いにこれと言った決定打を打つ事が出来ない。

この戦いでの体力の消耗はモーションが大きい竜斗の方が大きいけど、創真にはまる一日戦い続けた疲労が蓄積している。

一撃食らうと負けだと言う緊張による消耗も大きい。

正直不利であった。

「能力を使わんとってもこれほど戦えるなんて、さすが俺の見込んだ男やで・・・。

お前と遊ぶのは楽しかったけど、そろそろ仕舞にしようか・・・」

竜斗は創真に止めをさそうと、右腕を後ろに構え気合いを貯めている。

構えから見て全体重を乗せた右ストレートだろう。

今まで右ストレートを温存していた事を考えると、これが最後の決め手と言う事だろう。

モーションも隠さず何のひねりも無いが、それだけスピードとパワーに自身があつての事だ。

例え避けたとしても間違いなくその拳は創真の体を貫くだろう。

だが、これこそ創真の狙っていたものだった。

竜斗がとどめを刺そうと全ての力を打ち込む時……。

それが唯一にして、最後のチャンス……。

一步間違えれば命を奪われるし、確実に無事では済まされないだろう……。

覚悟はしていたはずだが、無意識に体が震えて来る……。

やっぱり怖いものだな……。

ふと、二つの暖かくも力強い視線を感じる。

空と姫だった。

あいつらはこんな臆病な俺を信じて見守ってくれている。

そうだ、俺はあいつらの為にも勝つんだ……！

絶対に負ける物かっ……！

創真は強く拳を握りしめる。

「俺にはまだ戦わんといかん理由がある……。

まだ守らんといかん奴がおる……。

今まで楽しかったが、サヨナラやっ！！！！」

来たっ！！！！

全てが静止しているかと思う程、ゆっくりと竜斗が迫り来るのが解る。

迸る汗。

強く噛み締められた歯。

大きく捻られた腰。

全体中が乗せられ陥没するアスファルト。

躍動する背筋。

まるで弾丸のように回転が加えられた拳が空気を切り裂いて行く。

創真は左足を軸足にし、右足を軽く前に突き出し、左腕を迫り来る拳に向かって突き立て、右腕を後ろに構える。

創真の左手と竜斗の拳が接触する。

創真の左腕は大砲に当たったかのような衝撃を受け、肩から先が捻れながら宙を飛

んで行く。

毎度おなじみの痛みではあるが、何時までたっても慣れる事は無い。

そして、左手の浮けた衝撃によって、左足を軸にして創真の体は勢い良く右に回転する。

軸になった左足はアスファルトにめり込み、骨が砕け靭帯が大きな音を立てて千切れる。

更に右足に全体重を乗せ、創真の体は竜斗の力と自分自身の力によって弾丸のように加速する。

そして、全ての力が集結した右の拳が竜斗の背中へと迫る。

創真の拳はメキメキと砕けながらも、凄まじい加速力によって竜斗の背中へとめり込んで行く。

当然だ・・・！！

竜斗の攻撃力に自分自身の力を加えて返しているんだ！！

効かないはずがない・・・！！

問題は俺の腕が保つかどうかだっ！！

だが、竜斗に致命傷を与える前に、創真の骨は粉々に砕け散り、肉が弾け飛び、限界を迎えようとしていた。

くそおっ、絶対にっ！！！！

絶対に負けてたまるかぁ！！！！

その時、太陽が顔を出し、逆光が二人を包み込んだ。

戦いの中にあり、極限の状態であると言うのに、その光がやけに暖かく感じた。

その日差しの中に空の存在を感じる。

「頑張っ、お兄ちゃん！！」

空の声をを感じる。

そうだ、空と約束したんだっ！！！！

絶対に勝つって！！！！

刹那的に創真の意識は何処までも拡大して行った。

地球を離れ遙か宇宙まで。

背後には太陽が輝いている。

その傍らには創真の手を力強く握る空がいる。

「私も一緒に戦うよ！！」

どんな現実でも二人だったら乗り越えられるよっ！！！！

「行こう、空！！！！」

創真の拳は竜斗から受けた力に、目映い光のような力が上乘せされ、血肉を飛び散らし砕けながらも、竜斗の背中へと突き刺さって行く。

「うお————っ！！！！！！」

そして、次の瞬間、竜斗の胸から創真の血に塗れた右腕が生えていた。

その手を引き抜くと、竜斗の体から滝のように血が溢れ出る。

・・・。

・・・。

・・・。

暫しの沈黙の後、同時に倒れる二人。

「まだやっ！！！」

「負けてたまるかぁ！！！」

致命傷を追いながらも二人は、気力を振り絞って立ち上がろうとする。

朝日に包まれる二人の影。

・・・。

・・・。

・・・。

「なんや・・・。

俺の力にとんでもない力を加えてくれたやないかい・・・。

いくなれば絶対破壊能力・・・。

まるで、人を強く惹き付け、近づけば全てを焼き焦がす太陽のような力や・・・。

一人で二つの力持つなんて、ほんまズルイで・・・。

だがな、そんな並じゃないお前だからこそ、俺は産まれて初めて本気になれたんや・・・。

この終わりの無い戦いを楽しく思えたんや・・・。

さっきの言葉、そのまんま返すで・・・。

お前にやられるんやったら、悪くない・・・。

俺の分まで戦って・・・」

そういう途中で竜斗は崩れさった。

その胸からNo.XI 力のカードが飛び出す。

「り、竜斗お————っ！！！！！！」

創真は血に塗れて千切れかかった右手で竜斗を抱き起こす。

「このままっ！！」

このまま終わりってありかよっ！！！！

考えろっ！！！！

考えるんだっ！！！！！！

絶対に、絶対にこんな現実なんかには屈するもんかよっ！！！！！！！！

創真はアスファルトの舗装の上に転がった自分の左腕を見る。

「そうだっ、姫っ！！！！」

戦いを見守っていた空と姫は急いで創真の所に駆けつけて来る所だった。

「俺にはお前が必要だっ！！！！！！

頼む俺の力になってくれ！！！！！！」

「わたくしは何時でもあなただけの物です事よ！」

創真は竜斗を抱きかかえながら、姫にキスをする。

創真の中で姫を通してソーマの世界が広がって行く。

ソーマは再生した左腕で竜斗の傷口に触れる。

「君との毎日。

君との戦いは最高に楽しかったよ。

僕は気に入った物は何時までも独り占めしないと気が済まないんだ。

そう、君には死すらも許されない。

僕からは永遠に逃れられはしないのさ」

竜斗の体が光り輝き、その体が復元されて行く。

「さて、これはオマケだよ・・・。

これで君は二度と僕に頭が上がらないね」

そう言うと、ソーマは車椅子にのったまま体の力を無くしている夕鶴の頭に手のひらを掲げる。

かすかにその体が発光したかと思うと僅かな声を上げた。

「お兄ちゃん・・・！！」

「なんだい空？」

「お兄ちゃん大好きっ！！！！！！」

と空はソーマに飛びついてキスをする。

その瞬間、ソーマは創真へと戻っていた。

「こらぁ！！！！

わたくしのソーマ様に何するんですのっ！！！！！！

と、茫然自失となっている創真から空を引き離し、自分もキスをしようと迫るが空が邪魔をする。

「だめ！ お兄ちゃんは空だけの物なんだからぁ！！」

「こういうのも悪くないな・・・」

二人の少女に囲まれて顔が緩む創真。

竜斗の言う通り、女に不自由しないブルジョア野郎と言うのは間違い無さそうだ。

「創真さんったらスケベすぎますわ！！！」

「おにいちゃんのエッチ！！！」

空と姫の平手打ちが朝日の中で木霊した。

そして、ロンドン塔の上、その戦いの様子を全て見つめる影が一つ。

サングラスをかけたスーツ姿の男は不敵な笑みを浮かべる。

「一つの体に二つの心と力・・・。

破壊と創造を司るシヴァ神の器が今誕生した・・・。

そう、全ては神へと至る道。

本当の戦いはこれからだ・・・！！」

そして、それから数日の時が流れ、夏の太陽が照らすロンドン塔の元、屋上で四つの影がランチョンマットを囲んでいた。

「いただきまーす！！」

「って、だから何で俺の飯を取るんだよ」

創真の目の前に置かれたサンドイッチを横取りし、口一杯に頬張る竜斗。

「いいやろ、減るもんや無いし！！」

「いや、減ってるから」

「もう、お兄ちゃんったら意地汚いんだから！」

二人のやり取りを見てぷんぷんとしたポーズを取る空。

「意地汚いのはどう見てもコイツだろ。」

コイツには夕鶴が作った飯があるじゃないか」

「べ、別に竜斗の為に作ったんじゃないんだからね！！」

と車椅子の少女、夕鶴は顔を赤くする。

夕鶴はソーマの力によって意識を取り戻し、高校の編入試験を浮けて同じ高校に通うようになった。

空と同じ一年生で、同じクラスだ。

長い間寝ていた為、筋肉が弱くなっているの、まだ自分の足で歩く事は出来ないが、短時間であれば立つ事も出来るようになり、一通りの日常生活をこなせるまでは回復していた。

「いくら俺でも食えるものと食えんものがあるんやでっ！！

これは人間様の飯ちゃう！！

豚の餌っ・・・！！

いや、豚も食えない産業廃棄物やっ！！」

「うううううっ！！」

夕鶴は目に涙を一杯浮かべる。

「夕鶴気にするな。」

これはコイツの照れ隠しだ」

創真は楽しそうに笑うと、後ろから竜斗を羽交い締めして夕鶴の元へ突き出す。

「や、やめろーっ、ショッカー！！！！！！」

「はい、夕鶴！！

竜斗さんに食べさせてあげて！！」

空は謎の黒い物体を拾い上げると、車椅子に乗った夕鶴に手渡した。

「もう、そんなに言うんだったら、食べさせて上げるんだからっ！！」

と、夕鶴はお箸で黒いものを掴むと、無理矢理竜斗の口に詰める。

「死ぬうーっ！！！」

これは拷問やーっ！！！」

胃の中に得体の知れない物を詰め込まれ、白目を向いてグテツとする竜斗。

その目に一筋の涙が流れる。

ついでに言う口からも涎が垂れている。

「竜斗も泣く程喜んでるぜ」

「良かったね、夕鶴！！」

「別に嬉しくなんかないんだからね！！」

と頬を赤く染める夕鶴。

その時、創真のP501iがルパン三世のテーマを鳴り響かせる。

「あ、姫から仕事の依頼メールだ」

「あっ、お兄ちゃん、顔がにやけてるう！」

復活した竜斗が創真の携帯を覗き込む。

「み、見んなよっ」

「なんや、またバイトかいな！

どうせまた、仕事と偽って姫って子と温泉行ってヨロシクやるんやろっ！！

ええなあ、ブルジョアは！！」

「おまっ、なんて事言うんだよっ！！！」

「お兄ちゃん、それってどう言う事？！」

「いや、何でもないって！！！」

と言いつつも、思い出して顔が緩む創真であった。

「お兄ちゃんの馬鹿あ！！」

と創真は空に叩かれた。

「全然羨ましくないっ！！

全然羨ましくないんやからなっ！！」

「って、かなり羨ましそうな顔してるんだけど！！」

と、夕鶴は竜斗の向こう臍を蹴った。

「あたっ、何で俺まで蹴られなきゃあかんのやあ！！！」

そうこうしている内に校庭にディアブロが進入して来て、ドリフトしながら停車すると、中から傘をさしたゴスロリ少女が降りて来た。

学校中がざわつく。

「創真さん！！

迎えに来ましたわよっ！！！」

「・・・あいつ、相変わらず凄すぎるな。

待たせるとかなり恐ろしいので行ってくる・・・」

「あ、お兄ちゃん！！」

「・・・ん？」

「気をつけてね。

それから、二人で温泉なんか入ったら許さないんだからねっ！！」

「・・・まあ、行ってくるよ」

創真は保証は出来んと心の奥底で思いながらも、そそくさと立ち去った。

そして、急いで校庭まで走る。

「さて、行きますわよ」

「お前さ、校庭まで車で進入すんなよっ！

しかも、無免許運転かよっ！？」

「あら、そんなちっぽけな事、わたくしがイチイチ気にしてられません事よ」

「俺の身にもなって、ちょっとは気にしてくれよな」

「ゴチャゴチャ言ってないで発進ですわ」

「はいはい・・・」

創真は既におなじみになったディアブロのコックピットに滑り込むとギアをローに入れて、砂煙を上げながら発進する。

「あらあら、創真さんったら随分気合いが入ってらっしゃるのね？」

「そうか？」

・・・。

創真は少し考えてから言う。

「・・・まあ、そうかもな。

前にお前が言ってた自分の道と共に歩む人って話。

その答えが解って、自分で選んだんだ。

だから、充実しているのかもな」

「で、それはわたくしと空さんと、どちらと歩む道ですか？」

・・・。

「ぐっ・・・」

創真は冷や汗をかいて口ごもる。

「まさか、どちらともなんて、スケベな答えじゃありませんわよね？」

創真は姫を向き返り、意を決して言う。

「ああ、俺は空も好きだけど・・・。

姫・・・、お前も好きなんだ・・・！！

両方揃って初めて俺は俺になれるんだ・・・！！

スケベと言われようが、それが俺の本心なんだよ・・・！！」

しかし、返って来た言葉は意外とあっさりしていた。

「あら、知ってましたわよ」

「そんだけかよっ！！」

「そんな事、今更言うまでも有りませんわよ。

だって、わたくしもそんなあなたの事が大好きですもの。

知ってて当然です事よ」

と姫は運転する創真の頬にキスをした。

創真は顔を赤くして頬を押さえる。

「さて、ぼーっとしている暇有りません事よ！

なんとと言っても、あなたはこの間のネットオークション詐欺事件の犯人をみすみす逃がし、赤字を出してしまったんですから！

その赤字分と、先日の一宿一飯一女の借りを返すまでは、ガンガン働いて貰わないと困りますわ！！」

「まじかよっ！！」

「あら、あなたの今の借りを知りたくて？」

「いや、知りたくも無いから！！」

二人の乗ったディアブロは神戸の街を駆けて行った。

あとかきの事

ソーマ×ソーマを最後までお読み戴きありがとうございます御座います。

この作品は1999年を舞台にしたバトルもので、都市を舞台に超能力者が戦うと言う、当時の作風を意識して書いております。

登場する小物は当時の流行を思い出しながら書いております。

また、舞台は神戸で全ての場所にモデルとなる場所を設定しておりますが、現地には行った事が無いので、間違っている箇所があるかもしれません。

神戸をよく知っている方に言わせれば違くだろって所もあるかと思いますが、助けると思って教えて頂けると幸いです。

ついでに言うと、ディアブロとGPZ900も乗った事が無いので、想像だけで書いてしまっています。

この作品で注目して戴きたい事は雑魚敵です。

生徒会コンビは当初真面目なキャラクターを想定していたのですが、掛け合いの面白いキャラとなり、そのまま暴走して体中の穴と言う穴から四大元素を発現させ、尻から風を出して空を飛び交い、股間からウォーターレーザーを出して敵を切り裂くと言うキャラへと変貌しましたが、あまりにも強く面白くなりすぎるので現在の形に変更されました。

また、小アルカナ6人組のオタクコンビは当初コスプレで自分の世界に入り込んだキャラで、ソーマと姫とどちらがよりイッチャっているか競い合うって展開もあったのですが、面白くなりすぎるので変更しました。

そして、小アルカナの6人組の代わりに姫の秘書と、孤児院の女職員が敵として登場する案もありましたが、これも面白すぎるので止めました。

このようにギャグに走りそうになる自分との戦いで、雑魚とのバトルシーンを書いていきます。

ちなみにイラストは一緒にiPhoneアプリ向けのコンテンツを制作している「よもぎ史歌」先生に書いて頂きました。

Soma x Soma

<http://p.booklog.jp/book/25309>

著者 : ゆうすけ

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/yusuke-e256/profile>

発行所 : ブクログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/25309>

ブクログのパブー本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/25309>